關取千兩幟

勝負附貳枚續

第一

次第　別れの跡の振狐、〳〵、こんくはいの涙なるらん。　狂言「是は此邊に住居致す古狐でござる。爰に有者の候が、何時の頃よりか狐を釣初め、面白いと思ふてか、釣程に〳〵、我等が眷屬を釣取て、某をも覘へ共、そつ共油斷致さぬ所で、聊爾に餌を食みに出ふ樣もござらぬ。爰に彼が伯父坊主に、白藏主と申がござる。此白藏主の申さるゝ事は、あまさか樣なる事をも、彼者が承引致す所で、今日は白藏主に化、異見を致し、釣止らせふと思ふて、化たかと存る。先彼獵師の許へ行ばやと思ひ候」住馴し我古穴を立出て、立出て、足に任せて行程に、獵師の許に著にけり。「急ぐ間、獵師の元に著てござる。誠に彼者が、犬を飼ぬが一つの屑でござる。犬を好て飼ならば、中々我等ごときの寄付事も叶ふまいくはい」犬聲。「遠鳴で有たもの。ゑいきもをつぶした。先案内こふ。物もう、

そつ共―ちつとも

あまさか樣なる事―無理な事

犬聲云々―つぶした迄一本になし

ありやる―ござる

先奥へ云々―申さう迄一本になし

なかくさし云々―隠すな、以下かくもぬかと迄一本にたし

此間狐を云々―一本「成程此間狐釣を致しますは夫は心なき事でおじやる」とあり

案内もう」狐釣「表に物もうと有。案内誰、どなたでござる。ヱイ白藏主様」烏「マ愚僧でおりやる」狐釣「こなたなら案内なしに通りはなされいで、夜中に何と思ふてお出なされました」烏「只今參つたは、別の事でもない。ちと其方に異見のしたい事有て參つた」狐釣「御異見とござるなら、いか様の事成共、承はりませふ。先奥へお通りなされませい」烏「イヤ〳〵思ふ子細が有所で、奥へは通るまい是にて申さう。聞ばそなたは狐を釣るとの」狐釣「イヤ左様の事は存じませぬ」烏「なかくさしましそ。寺へ來る人毎に、アレあの蜘の殿こそ、狐を釣れ、人にさへ異見をいふ者が、あれが目にかゝらぬか、と人ごとに云せらるゝ。よもや僞ではおりやるまい」狐釣「御存の上は、隱しませふ様はござらぬ。此間狐を一つ釣ましたが、面白ふ存じて、釣程に〳〵、七八疋も釣たでござらふ」烏「ムヽシテ狐を釣て何におしやる」狐釣「皮は引ぱいで引敷に致します、肉は料理して食べまする、骨は膏藥錬に賣りまする」烏「ムヽ聞てさへ身が顫はる。彼狐と云ふ者は、執心の醜しい物じや。此後はふつつり止らしませ」狐釣「何が扨此方の御異見でござる程に、此後斷然釣止りまするでござらふ」烏「何じや止らふ。夫なら爰に、狐の執心の恐しい物語が有、語て聞そふか。ア迚も釣止るまいならいらぬ物かい」狐釣「イヤふつつり止りませふ。お聞

しなされませい」皇「夫なら其床几をおくりや」狐鈞「畏りました」皇「抑々狐は、神にてぞおはします。お床几」皇「此物語を聞て後、釣ふつつりとお止りやれや」狐鈞「畏りました」皇「抑々狐は、神にてぞおはします。天竺にては八汐の宮、唐土にては更衣の宮、我朝にては、稲荷五社の大明神と申も、狐なり」狐鈞「ハア」皇「又鳥羽院の御時、玉藻前と申て、容顔美麗の美しき上臈の有しが、彼を玉藻前と申、子細は、四角八方より其姿を見るに、裏表なき美しき女なり。惣じて玉には裏表なき物なれば迚、玉藻前とぞ召れける」狐鈞「ハア」皇「有時清涼殿にて御歌合せ有し時、忽いそのごとくなる大風吹來り、禁中の灯火一燈も殘らず消ぬ。其時玉藻前が身より光りを出し、玉殿は中に及ばず、御庭の眞砂の數迄隈なく見え候間、帝此光りに當り給ふと、忽御惱とならせ給ふ。貴僧高僧を請じ申され、いろ〳〵御祈禱候へ共、更に其驗なし。爰に安倍の泰成と申博士を召れ、占はせて御覽ずれば、泰成參り、念比に考申樣、是は偏に玉藻前が所爲なり、根本此女は狐なり、天竺にては班足太子の塚の神、大唐にては幽王の后褒似と成て七帝迄取殺し、今又日本の帝王を取奉らんと、玉體に近付、かゝる執心の恐ろしき者なれば、急ぎ調伏有て然るべしと、頓て咒壇を築て護壇を飾り、藥師の法を行ひ給へば、大内にもたまり兼、下野國、那須野の原に落て行。こ

むくりや―奚上

ゐいそのの如くゐいかやうなと形容していふ

班足太子―仁王經に印度の班足太子王位に登らんとて外道の教を信じ千王の頭を取つて塚の神を祭りし事あり

こゝたい國内か

くない通化の者なれば、疎にしては叶はじ、と三浦之助、上總之助に仰付らる。兩介承はつて下野の國那須野の原に下著して、百日の犬追物とぞ聞へける。百日の犬滿じければ、大き成三ツ尾の古狐顯れ出るを、一の矢は三浦之助、二の矢は上總之介、ひやう、どつきと射る。得たりやおうと飛で下り、劒を以て彼を害し、帝へ此由奏聞申ければ、君の御惱も忽御平癒有、國も納り、太平の御代と成。猶も其執心大石と成て、人を取事數しらず。地を走る獸、空をかける翅迄、地に落かゝる殺生を致す石なれば迚、殺生石とは名付たり。爰に玄翁といへる僧、彼石に向つて喝す。汝元來殺生石とうせきれいしやう、何れの所よりか來り、何れの所にか去」と、拂子を以て三ツ打。打れて此石割れしより、猶も人を取ぞかし。かゝる執心の恐ろしき者なれば、此後釣ふつつとお止り有かしと思ひすよ」狐釣「恐ろしい物語を承はりました。此物語を聞ては、狐を釣ふ物ではござらぬ。此後ふつつりと釣止ませう」白「夫は嬉しい。夫なら其狐を釣輪罠とやらが有ふ、夫をお捨ちやれ」狐釣「お歸りなされたら捨ませう」白「いやといへば、其道具を見たら、釣たい心も出ふ。身共が見る前でとつとゝお捨ちやれ」狐釣「畏りました。是でござる」白「ムヽ穢しや〳〵。とつとゝおすちやれ」狐釣「捨ましてござる」白「何じや捨

いやといへば！
いやとよ

た。ハアヲヽ能ふお捨ちやつたのふ。異見を申にお聞やらずば、腹が立ふに、得心めされて滿足致した。奥へ通り、子供にも逢ふなれ共、清められてから參らう」狐釣「兎も角もなされませい」自「そなたも又些寺へお出やれ。何も馳走はなけれ共、昆布に山椒、能い茶を申そふ」狐釣「其お茶が何よりでござる」自「アヽお出やれとは申たれ共、何も馳走は申さぬ、昆布に山椒をまいて」狐釣「ハァ」自「茶計申さう」狐釣「よふお出なされました」自「アお出やれと申たれ共、何も馳走は申さぬ。昆布に山椒茶計申そふ〳〵、茶計〳〵茶計〳〵、ワイ。ノウ嬉しや〳〵、まんまと異見を致して、畏を捨さしてござる。是から何方へ行ふ共、身共が心の儘じや。此樣な心面白い時は、小唄節で歸らふ」狂言歌「所に住めばこそ浮名も立のふ、往のやれ、我古塚へ、しやなら〳〵とワイ」「畏を捨たかと思ふたれば、身共が歸る道の眞中に、はりすまして置おつた。アノ善九郎は聞ぬ者じやナア。誠に人間の狐をば野狐の心と申て、物疑ひをすると申と聞たが、彼奴は狐には劣つた奴じやナア。いや、又どの樣な事がして有ば、若者共が畏にかゝつたしらぬ。畏の樣體を見て置度い物じやが。ムヽ何やら小さい眞黑な物が有が。ヤイ儕め、其小さい形で、能ふ身共が眷族を釣取たなア。夫がよいか是がよいか、覺へたか〳〵。ムヽ可い匂ひかな〳〵。畏に

しやなら〳〵しなり〳〵

かゝつたしらぬ
|かゝつたかも
しらぬ

かゝつたこそ道理なれ、上々の若鼠の油上。是が食ずにおかれうか、飛かゝつて一口にくはふ。喰たいなァ〳〵。ァ誠に、眼前若者共がかゝつたを知りつゝ、身共が毎にかゝつてはは成まい。道をかへて歸らふ。ムゝよい匂ひかな。此匂ひを嗅いでは中々歸られぬ。そうじや餌計むしつてくふに、食はれぬといふ事有ふか。飛かゝつて一口に食ひたいなァ〳〵。何をいふても此、身重い形で、毎にかゝつては成まい　よい〳〵、たつた今此化た衣裝を脱いで來て、一口にする程に、其處をのいたら比興者で有ふぞゑい。くはい〳〵〳〵」中入待兼樂屋には、大阪屋の全盛、錦木太夫、禿共、煽ぐ引舟押ぬぐふ、汗は流れて泉派の、後の出端の衣裝をちやつと、錦「ァゝおきや〳〵。もう狂言所じやない」と、禮三が胸倉引据て、「お前樣は〳〵、能ふも〳〵、あんな惡性なされますな」禮「コゝコレ、何いふのじやぞいの。ェゝ新住の京が事か。さしてもない事を、悋氣はゆるりと仕やいの」錦「イェ〳〵なんのそんな事云や致しませぬ。京大阪での色事なら未だしも、遠い近江の彦根とやら、しかも屋敷の女中樣が、お前に逢してくれい迚、あちら座敷に待て居る。私は知らぬふりで、袖之丞に問したれば、禮三樣に國で深ふ云かはした　とあつかましい云樣。ノウ百合」耳「アィ〳〵あの通り。お前の惡性に違ひはない。何と覺がござりませ

比興者―臆病者　中入云々―是より狐釣の狂言を見物せる太夫の話にうつる　引舟―太夫につく閨女郎　泉派―泉の如くにかく　後の出端―中入後の出端―中入ざしてもない―さ程にもない

うがな」禮「ムヽ有でもなし無いでもなし。彦根は親共から御用を聞家。去年お國へ往た時に、三島彌太夫といふ人の娘、お才といふのにツィちよつと」錦「其ちよつとが癖の悪い」と、口舌の半、狂言半、善「若旦那〳〵、どうでござります。肝心の所間が抜てらりに成た。太夫樣こりやマア何事」「コレ善九郎樣かうじやわいな」と呼く引舟、善「イヤア我折。扨は旦那が釣狐じやない釣娘」杢「サイナ女子を化す男狐」禮「おれも狐の面目ない。嘸こんくはいでござりませう」杢「エヽ口合所かいな。妾は悠氣仕はせぬが、マアどふせうと思召」禮「ハテどふといふて、往なして仕廻ふ分の事。したが、おれに逢ずば往ぬまい。ちよつと逢て能い加減に欺して往なそふ。善九郎爰へ呼んで來い。コリヤ〳〵太夫が事は隱すのじやぞ」善「チツトそこらはすなさせん。どうなと勝手」に走入。ついに來なれぬ難波潟、田舍育のほつとりも、堅いは武家の育柄、若黨らしいが付添て、しとやかに座につけば、禮「ヲヽ是は〳〵お才殿」才「アイ禮三樣、お久しうございます」禮「何として爰へは」才「ハイ私は父樣に勘當受て參じました。お前と不圖云かはした、樣子は知らず彌太夫樣、丹波の家中津田兩助樣とやらへ、嫁入さす約束した、と聞てはつと痞が上り、母樣に打明て。ノウ瀬平」惠「成程左樣。兎角あなたはお前に添ねば死る

我折―あきれた
こんくはい―吼喰と後悔との口合
勝手に―勝手にやるにかく
ぼつとり―おぼこ娘
ちり―亂離か

心、と申て云号の兩助様には立ず、母御様御合點で國を欠落、再び屋敷へ歸らつしやると、手打に逢娘御。否でも應でもお前の奥様。お手渡し致したら、拙者は早國へ歸りたい」と、様子段々聞度に、禮三が恂り太夫が修羅。腹立顔をお才がながめ、「申あなたは何方様」禮「イヤ是はおれが伯母貴じや」才「ヘエても扨も、お若い叔母様でござんす。イヤ彼の様に見へれど、年は四十六、元服した子が二人有」才「是はしたり。申叔母御様、お聞遊ばす通りなれば、今から諸事をお引廻し」と、いひかけられて錦木も、不承〳〵に、「アイ能ふこそ禮三を可愛がつてやりなはます。私は婆々の事なれば、增花のお前様、お樂なはませ」と、ぴんとするのを鎭める禮三、綾操り廻す狂言師も、あどにこまりし最中へ、「禮三〳〵、ちと逢ふ」と立出るは、藏屋敷一原九平太。禮三はちやくと、「コレ瀨平殿、お才は少の間、隣の西照庵の庭見せて來て下され。太夫もあちらへ」九「イヤ錦木は爰に置け」禮「イヤ申、今日は禮三が揚た太夫。廓の借貸は格別、お前の慰には成ませぬ。構はずと往きや〳〵」と、追やる跡にむつと顔。九「町人と武士とが買論しても濟ぬ事。先達て錦木は、親方左衛門方へ、手附金渡し置たれば、今日明日には身受して、身共が女房。何程げんき張ても部屋住の禮三、楯づき立は叶はぬ事」と、惡口明て次の間

修羅云々—阿修羅の如き立腹する顔
伯母貴—伯母御に同じ
あど—相手
げんき張る—力瘤を入れる

くつわ―忘八とかく女郎屋の亭主

兼て―金とかく

から、手代の善九郎、「コレお侍様、此方も二百兩といふ手附、くつわへ渡した使は拙者。若旦那、彼云はれては立ませぬ。ヱヽ今日中に身受して見せたいな」九「成らぬ事〳〵、七百兩の金がなくては、太夫が身受はならぬはい。吹きや飛ぶ樣な身上で、何として何として」と、當こすられて若氣の禮三、無念ならがも有合さぬ、兼て始終を一間の中、「金子御用に立申そふ、禮三殿」と、呼かけて、しづ〳〵出る其物體、禮「ヱヽお前は江州の村岡團右衞門樣」村「ヲヽ御用に付て登り申た。樣子あれで承はつたがお手前こりや立まい。只今太夫を身受めされ。今其方に有合さぬ金子、團右衞門が貸し申」と、家來に持せし挾箱、取出す五百兩、禮「ヱヽイそんなら其金お貸し下さるか」村「ヲヽサ念の爲假證文」禮「ハア忝い。サア〳〵太夫主は此方の物」深き惠の硯箱、墨黑々と書判に、證文認め差出せば、善「コレ九平太樣。コレ此方の旦那は五百兩や七百兩は、嘘をする度に、ぶつ〳〵と吹き出る。ドリヤ太夫主の身請金、親方へ渡して來ふか」と、金を財布にひけらかし、廓をさして行跡は、九平太はぐつ共いはず。禮三は氣味よく、「ナント部屋住の勢ひ御覽じたか。お氣にはさへられな、算用の知て有御知行で、太夫などは受出されぬ。ナァお侍」と當返す。折から中間かつつくばい、「團右衞門樣へ、お屋敷より急の御

ひけらかし―見せびらかす

さへられな―かけられな

當返す―あてこすりのしかへし

背中に腹―譬、他人より自分が大事の意　御無體―御無理

垢を抜く―あかりを立てる　盗ひろぐ―盗をする

そなお侍―そこなお侍

狀」と差出す。封押切て讀終り、村「氣の毒な事が有。ナニ禮三、今の金子返してくりやれ」禮「エヽたつた今お貸しなされた其金を、返せとは」村「イヤありや、殿の御用金。只今の難義を見て、暫くの間に合せた武士の情。今相役より金子急入用と申越たれば、延引すると身共は切腹。背中に腹、サア返してたもれさ」禮「じやと申て、くつわの方へ遣はした金、今戻せとは余り御無體」村「イヤ身は無體は云はぬぞよ。此證文に、何時成共返辨と書たは傷りか。ハアヽこりや聞へた、借證文を反古にして　殿の金子を横取じやな」禮「アヽ申々、何の左樣な」村「ヤアぬかすな。もふ此上は藏屋敷へ引立て、相役の手前、垢をぬく。憎くい奴」と、扇で丁々九平太も、「盗ひろいだ其金で　受出し自慢置上れ」と、二人が足下に蹴飛し〳〵、「サアうせう」と、引立行。「申々暫」と、聲をかけて立出るは、禮三が親淨久禪門。禮「ヤア親父樣、何時の間に」と、いへど見向ず、圍右衛門が前に手をつき、禮「快が不調法、此頭に免ぜられ、何事も御了簡」と、久三に持す千兩箱、蓋追取て「五百兩、御返進」と差置ば、村「チヽ叮寧の仕方。斯うなうて叶はぬ筈。淨久にも堅固で重疊。金子相違ない上は、急の御用、罷歸る」と、挾箱に取納、「そなお侍、おさらば」と、互に默禮目遣ひに、樣子有顏九平太も、隣座敷へ立て行。心

がかりに窺ふ錦木、お才も歸る小庭先、聞共知らず親淨久、「ヤイ禮三、此親が年々捗ぎ溜た身上、金銀は親の身の膏。其膏を始末する事を知らねば、終には金銀の冥加に盡る。金は町人の寶物、芝居の狂言でも、三種の神器とやらいふ寶物の事ばつかりで、一日座中があたふたする。其大切な寶物を、色狂ひに遣ひ果すたわけ者。今日も町の參會に、西照庵へ往たれば、東座敷の襖に書て有た落書、コレ是見い」と取出す、襖のまくり相合傘に、大坂屋錦木、鶴屋の禮三。「是見た時の町の衆の手前、あんまり腹が立て、引まくつて戻つた。まだ其傍に、誰や彼や書て有た。ハア何とやら、ヲヽ岸本屋おるん」として、其傍に、相人は醫者殿かして、慶子と書て有たわい。コリヤ子供はかせぬ手合、子供の口の端に迄かゝる樣な事をして、鶴屋の名跡が立られふか。勘當じや、立て行」と、父の腹立身にこたへ、思はず知らず錦木も、「科人は私」と、お才も俱に轉び出、泣て詫する計なり。きよろ〳〵眼に善九郎、「禮三樣〳〵、只今くつわへ持て往て、今の小判を明て見たれば、コレ此通りの戎樣。こりやマアどふでござります」淨「ヤア何じや質金じや。ハテめんよふな。近江の屋敷で、村岡團右衞門といふ知行取が、質金を遣はふ樣はない」と、親子の不審、お才が不審、才「アノ村岡團右衞門が爰へ來たかへ」禮「チイノ」

子供云々―子供しかせぬいたづら

めんよふ―不思議

貰かけ―嫁に貰ひかけ

角前髪―池田炭にかく

土地の者云々―私は此土地の者でもないにあなたは大層私を御贔屓にして下さるとなりあどない―あどけない

追蹤―へつちひ

才「ヱヽイ申其團右衛門は私に狀を付て、父様へ貰かけ、聞入ないを意趣に持、闇討にせうとの工が顯はれ、則私が勘當受た其日、一所に團右衛門もお國を追放」「驚ャアそんなら彼奴はお拂者か」才「サイナ、其跡で殿様の備前長光のお刀紛失。是も大方團右衛門が所爲」「驚「スリヤ今の金も衒られたか、傍此儘で置ふか」と、驅け出す禮三が向ふより、「若旦那お待なされ」と、名乘は高き岩川次郎吉、池田の名物角前髪、「私は角力の寄初で、浮瀬からたつた今。聞た所が常體の衒と違ふて、根の有仕事、つい詮義は成ますまいが、差當つてお前の身の上。御隱居様聞へませぬ。天にも地にも、たつた一人のお子じやないか。世界に金遣ふ者がなけりや、金設る者もない。金銀は廻り物、色狂ひした迚、勘當とは余り胴欲でござります。といふたらお氣にさはらふけれど、土地の者でもないに、どうした事かきつい御贔屓、お前の御恩忘れぬから、大事の若旦那、此位の事で勘當とは、ちつとお前老耄かと思ひます。わしを贔屓して下さる氣なら一番此詮言は聞て下んせ、御隱居様」と、大きな形で物云の、あどない所が關取なり。淨久手を打、「次郎能ういふてたもつた。常は追蹤しても、かういふ場所に成と、踏込で詮言する者は、手代にもない。過分なが、此勘當はどふも赦されぬ。といふ子細は此女中、御用承る近江の

新町—大阪の遊廓

久離切—縁切る

十徳—被布の如きもの隱居又は醫者など著用したり

引負—遣込

屋敷の物頭、三島彌太夫殿の息女、丹波の家中津田兩助殿へ嫁入する筈の人と、結び合た禮三が惡緣。斯う欠落して來たれば、國へ往せば直に手打、といふてお出入の屋敷の娘御、不義合點で、おれが子の禮三に添しては、御家中へどうも顏が出されぬ。かういふ事は知らいで、息子が夜泊日泊は、新町の太夫故、いつそ身請してやつたら、結句しまりが出來るであろ。聞た樣子が、此お山も、眞實禮三を可愛がつてくれるげな、高が千兩迄の事、給銀の高い乳母置たと思ふて、身受の充に持て來た隱居金の千兩。まだ五百兩殘つて有。是で濟なら金立て、女房になと妾になと、他人の事はおりやかまはねど、棺桶へ片足踏込で、究竟な躰を、久離切ねばならぬとは、思へば惡い入前」と、十德の袖顏にあて、泣倒れたる親心。禮三も不孝の悔泣、女郎も俱に有難淚。善九郎がけらく笑ひ、「結構な親旦那の御了簡。そんなら其金、錦木が身の代、たつた今親方へ私持て參じましよ」善「イヤく、こりや其方は賴ぬ。此使は岩川」善「デモ最初から手附打た使も私」善「サア夫じやによつて猶やられぬ。善九郎隙やつたぞ」善「エヽイ」善「イヤ恂りすな、覺の有事。よう禮三をたわけ者に仕上たな。末々は番頭脇にもしてやらうと、思ひの外の不忠者。引負萬事書立て、お上へ願へば首の無い奴。隙出すを有難いと、出

書消す—羅消す

千羽川—岩川と同じくよい力士

救ひ投云々—救ひ投、手取は相撲の絲内義—ないにかくよごんすか—よろしうござるかて失せおらふ」ときめ付る。白藏主の正眞に、尾の出た大和の善九郎狐、書消すごとく逃失せける。傍の財布に岩川が、「金子しつかり受取ました。禮三樣錦木樣、お二人の身の上は、次郎吉が命にかけて。じやがお才樣とやらも、禮三樣に女夫の約束。男は一人、女中は二人、一つに束ねて世話も成まい。ハテどふせう」と行當る、次の座敷の中から取て、「其女中預りましよ」岩「ムゝそふいふは何處から。女中の聲じやが此子と近付のお人か」女「イゝエ近付ではないけれど、岩川樣の預僧い女中樣、千羽川の吉兵衞が女房よつが預つて歸りたい。誠に三島彌太夫樣、大阪の藏座敷お勤の時、お目かけられた吉兵衞殿、其彌太夫樣の娘御、御世話せねばならぬお方。氏神樣へ參つた次手、立寄た此惠海庵。幸の所へ來合せたも、明神樣のお引合せ。お才樣の身の上、どうぞ私に世話さして下さんせ。賴まする」と差當る、難義を救ひ投かけて、賴むは天滿千羽川、隱れ內義の手取なり。岩「ヤレ嬉しや。よい買人が出來たぞ。吉兵衞殿に預れば慥々。そしてあ病氣はよごんすか」ょ「此間は大分よござんす」岩「ヲゝそりや嬉しい。あの人が出やしやれぬと、私やもう片腕もがれた樣で、ほんに誓文、早ふ本復しられます樣と、神々を祈て居やんす」ょ「イヤもふ此方の人もお前の深切、影ながら悅んで、どふぞ秋の角

片屋—西方東方

二人—岩川と千羽川

いづこかは—何處からか

ぐち—共鶴

力には岩川と取たいと、力で計居られます」と、片屋かはれどかはらぬ付合。岩川最贔の禮三郎、「ヱ、おれが嫌の千羽川に、世話賴のは口惜い」禮「コリヤヤイ、勘當の身に成て、相撲取の最贔所か、傍が人の最贔を受ねば立ぬ樣に成たはい。賴にやならぬ二人の衆。今迄の樣に、岩川々々と澤山にいふ事ならぬぞ。ア、是もいらぬ世話、何事も皆後生菩提、なんまみだ〳〵」珠數に涙を繰交て、しを〳〵歸る爺親に、一人は嫁共舅共、心計の暇乞、只伏拜む親子の別れ。引違へていづこかは、くつわや左右衞門、禮「チヽ幸ひ好い所。錦木太夫が身受金、ソレ五百兩」と投出せば、左「コリヤ忝い」受取の一札、さら〳〵〳〵と書認め、差出せば岩川が、押開き見て不審顏、「五百兩受取、殘つて二百兩とは何のこつちや」左「ハイ太夫が身の代は七百兩。まだ二百兩足ませぬ」禮「イヤそりや手附に二百兩、善九郎が持て往た筈」左「けもない事〳〵。慥な鶴屋の禮三樣、其お顏が手附じやと思ふて、二百兩が一百兩も取た覺へござりませぬ。今聞きや御勘當とやら。跡金の濟迄は、錦木は連て歸ります」と、手を取ば引はなし、禮「今日一日は揚の女郎、指もさゝす事ならぬ。明日の朝迎におこした。跡金は此岩川が呑込でゐる。若旦那、スリヤ是も善九郎めが仕事。思ひ廻せば何奴も此奴も、皆ぐると見へる」禮「サア取

分憎いは九平太め。岩川頼む、最前の仕返し、ぶつて〳〵ぶち殺してたも」岩「サア〳〵よごんす。コレくつわや殿、此方様往にしなに、隣座敷の九平太様を、爰へ呼で貰ひましよ。したがわしが顔は出し憎い。此仕返しはお前にさす。怖い事は何にもない、岩川が控へてゐる」と、炬燵の櫓取てのけ、蒲團すつぽり關取の、體を直に櫓なり。岩「何でも危ふ成た時は、炬燵の傍へ連てお出」と、いへば呑込む禮三郎、「皆邪魔になる隱れた隱れた。是からおれが荒事を、お目にかけん」と、しこ踏しめ、待間程なく出來る九平太。「身に逢たいといふは誰じや」禮「イヤおれでごんす」九「何じや二才めが何の用じや」禮「ぐつと用の有のじや。大義ながら一寸炬燵際迄出て貰ましよ」九「へゝしやらな蚊蜻蛉め。何なと早くいふて仕廻」と、炬燵にどつかり、禮「サアしてやつた。別の用でもない、最前わりやどふして打た。其仕返しに打すへるのじや」九「ハゝ〳〵〳〵、うぬがざまで身共を。素町人め、推參至極」禮「イヤ推參呼はりせまい。今迄こそなれ、勘當受たら破かぶれ、屋敷でも侍でも、何でも十九文じやぞ」九「イヤ慮外な」と拔かくる、鐺をぐつと後から、九「拔ぬはどうじや」とうろ付中、胸ぐら摑む禮三郎、九「ちよこざいすな」と突放せば、鐺返しに眞倒。九「もふ了簡が」と摑み付、足首取て締め上れば、九「アイ

あ前―禮三をさす
櫓―炬燵の櫓と相撲の櫓とかく
しこ踏しめ―胴を据ゑ
二才―青二才
しやちな―生意氣な
推參―無禮
十九文―何でもかまはぬ
了簡が―了簡になれて見るべし
足首取て―岩川の助力なり

つがもない—途方もない

解死人—下手人

此吉兵衛—もゝ、こが名代になれぼしかいふ

タ〳〵、うぬ何喰ふてうせおつたやら、つがもない力に成た」「ヲヽこたへたか」と又どつさり。とんぼう返り、山雀投、命からゞ〳〵體の煤掃、箒のむね打ぴつしやゝ〳〵、打伏せられて興覺め顔、九「うぬ武士をひどいめに合したぞよ。此返報は仕樣が有、待ておらふ」と炬燵の傍、尻目にかけて逃歸る。喜「出來た〳〵」禮三樣、强ふ見へた〳〵」鷹「イヤもふ炬燵の櫓が能ふ利いた。したが待ておれ、と吐かした詞が氣味が惡い」喜「ハテ何としませう。大方道に待伏せ、彼方からしかける喧嘩。せふ事がない、何十人でも撫切にする分。私に付てござりませ」と、鯉口寬ろげ立出るを、およつが呼留、「岩川樣御無心が有。お才樣をお供するは此方の人、吉兵衛殿に成かはつて預る私。女でも男の名代。お前の其魂を、わたしに借て下さんせ」喜「イヤ是は」よ「サア お前の方に入脇指、若夫が用に立た時は、お前は解死人。錦木樣や禮三樣の跡のお世話は誰がするへ 殊にお前ばつかり目充に、早ふ達者に成たい、と養生する吉兵衛殿。お前に若もの事が有たら、此方の人も病が重る。大事の命 爰で捨る所じや有まい。末々お二人見屆る心の堅めに、其魂此吉兵衛が預りましよ」喜「ムヽ誤りやんした。吉兵衛殿に岩川が魂、しつかりと預ます」よ「ヱヽ忝い、よふ聞屆て下さんした」禮「いよ〳〵かはらぬ二人が魂、見屆

池田—岩川
難波—千羽川

た曲彩三が證人」西はお才、東は錦木、「御無事でやいの」と、本妻妾、池田の關取、難波の名取、勝負は秋の相撲迄「おさらば」「さらば」と三重別れ行く。

第一

芝居は南、米市は北、相撲と能の常舞臺、堀江々々と國々へ鳴響きたる岩川が角力の内は夫婦連、爰に堀江の假住居、見世は初日の餝物、半紙毛氈煙草盆、羽織脇指取まはし、江戸酒は杉ばへ米俵、よその軒端を假初も、賑々敷ぞ見へにける。甲「扨積だの、見事、何じや、羽織脇指米も有、ゑらい張り込じやの」乙「いや又二三年こつちの角力に、めつたに負た事のない岩川」甲「したが今度の角力には、千羽川が病氣故、はづむまいと思ふたが、思ひの外きついはづみ」乙「ソリヤ其筈、勸進元の顔のよいのに、江戸方、九州方殘らず登り。岩川といふ贔屓の強い力の強い、あんな男を持者の顔が見たい」と表から内を覗て高々と、夫の噂女房おとは、出合頭に聞く嬉しさ。顔に少は紅桔梗の、前垂の紐縄暖簾、上てによつこり、「北野屋の七兵衛でござります」と「是は〳〵島の内の七兵衛樣、能ふお出、サア〳〵爰へ」に打通り、七「扨まあきついはづみ樣。千羽川が出ぬ故

杉ばへ—酒屋の前に吊せる杉ばやし
假初—偖るにかく
羽織脇指云々—皆鼎屋客より總頭に貰ひし品を竝べたる
夫の噂云々—夫の噂を女房が見物人と田合頭に聞く

に、どふ有ふと思ふたが近年の大入。今日は大方冥の關取が、取しやるで有うと思ふて、見物に來た序ながらちよつと悅びに參りましたが、關取はもふ往てゞ御座りましたか」とは「イエ〳〵今日は叶はぬ用事に付、つい近所迄參られましたが、もふ戻つてゞござんせう。マアほんにいつぞやは、いかゐお世話で、練物を緩と見物致しまして、忝ふござります。いつでも島の内の祭は、俄が多ふて賑やかな事。私等は在所者故、物見だけいと、えてはこちのに叱られます」七「イヤモこちらの方も門がざはつくばつかりで、奉公人が動かねば、肝心の商が少ない。イヤ斯ういふ中に遲なつたら入られまい。關取へ好い樣に賴ます」と、座を立上れば、とは「チヽせはしない、まあ御緩りとお茶なりと」七「イヤ遲いとよい場がござりませぬ」と、挨拶そこ〳〵歸りける。町中の最眉に肩も岩川が、鐵が嶽陀多右衞門と、打連歸る我家の内。とは「チヽ此方の人、戻らしやんしたか。陀多右衞門樣も能ふお出。初日から未だお目にかゝりませぬが、きつい大入でお目出度ふござります」陀「アイそりや樂でごんす。見物の足が早さに、そろ〳〵行ふと出かけた道で、岩川に逢たによつて、夫でちよつと寄ました」とは「夫はマア〳〵能ふこそお出。したが、まだ漸〳〵と今の先、櫓太鼓を打出しました。マア緩りとお茶成共」と、會釋に汲出

列 練物―祭禮の行

肩も岩川―肩も怒るにかく

端香—お茶の出ばな

木綿襷—いふにかくかけまくは口にかけんも恐と襷をかけとかく

たじむぎ—小言

す端香より、心の花香ぞ愛想有。岩「コリヤ女房共、留守の内へ今日の角力割は持てこなんだか」と廷「イエ〳〵まだ何にも持ては」岩「ハテ埒の明ぬ。今迄知れぬは、何ぞもめでも有かいの陀多右衛門」陀「サアおれも、初日に鈍な角力取たによつて、何でも今日はと思ふてゐるが、誰と合すぞ。相人によつては魂膽も工夫もして見にやならぬ。いつそ行て聞て來ふかい」と廷「ハテまあ能ござんすはいな。其内には持て來ふ。幸貰た肴も有、主と一所に飯上つて行しやんせ。ドレ拵ふ」と木綿襷、かけまく神にあらね共、菩薩廻りの女房は、勝手へ立て入にけり。「岩川樣お宿にござりますか。新町の大坂屋から參りました。左右衛門申ます、錦木太夫が身受の跡金、今日中に遣はされませぬと、こちらに身受の客衆がござります故、其方へ相談致します、お前のお顔を立まして、今日中は待ます、明日に成たら、此方へ太夫をやります程に、其時ゐじむぢの無い樣に、念を入いと申されました」と、云捨使は立歸れば、岩「ヤア其身受、外へさしては岩川が立物か」と、駈け出すを、陀「コリヤ〳〵岩川、其身受の譯も其客も、此鐵が嶽が知てゐる程に、マア行ず共よいわいやい」岩「ムヽすりや、其身受の相談を、われが能う知てゐるか。其身受の客といふは」陀「イヤ外でもないおれじや。ヲヽ、此鐵が嶽陀多右衛門じや程に、ヤ

こつき―口氣
腰―腰巾著

じやみる―事の成ちんとして止む事（俚言集覽）

あんだらくさい―馬鹿くさい
根葉―根にもつこと
がちりに―ざちりと

アそふ思ふて居いやい」と、俄にこつきも節くれ立、頬髭撫てのさばり頬、岩「ムヽ聞へた、こりや九平太が腰じやな。尤われが爲には、大事にかけにやならぬ人じやが　爰を能ふ聞分てくれ。あの錦木太夫は、おれが親方の禮三殿とは、きつう深い中じや。其錦木故、親の勘當迄受られた事、こりや云はいでも知てゐる事。其處らはまあ取てほつて、五百兩といふ金迄渡し、跡金の二百兩、才覺する其内に、太夫殿を外の手へ渡しては、何ふも岩川が顔が立ぬ。わがみが中へ入つたこそ幸、どふぞそつちの身受を、じやみる樣に云廻してたもるまいか。鐵が嶽、コレ頼む〳〵」と詞を下げ、事を分たる一言を、鼻であしらふ惡者作り、陛「ヲヽ此身受はどふせうと斯うせふと、おれが儘じや。われが頼樣にしてやろといふたら、勝手はよからふが否じや。わりや惠海庵で、九平太樣をひどい目に合したげな。ヲヽ強いこつちや。其仕返しを頼れてゐる此鐵が嶽、あんだらくさい事いふない」岩「ムヽすりや、其時の事が根葉に成て、夫故身請の邪魔するのか」陛「イヤ邪魔するとは何のこつちや。コリヤ錦木が身受は金づくじやぞよ。僅二百兩計の跡金を、團子の咽に詰つた樣に、ぎつちかはと吠へ頼かくとは違ふ、七百兩といふ金を、がらりに出して身受するのじや」岩「成程尤じや。兎角めい〳〵親方を、大事に思ふから起る

わがみ一ぜん前

事じや。何と斯うしてたもらぬか。おれを九平太様へ連て往て、貴方の胸の晴る様に、撲し成と踏し成とさして、身受は此方へさしてたも。わがみの云やる通、金づくの事なれば　今日中に跡金さへ出來れば、頼事も何にもなけれど、サちつと急に出來にくい。尤在所へ云ふてやつたら、工面の出來る事もあらふが　親共の耳へ入とむない。夫でわがみを頼のじや。又身請仕やつてからが、迚も太夫が九平太様の女房にやならぬ。すりや畢竟が　費といふ物じや」　皃「黙れやい。太夫が隨ふが隨ふまいが　夫にや構はぬ。九平太様には金がたんと有によつて、其金でわいらが頼をはり廻すのじや」　岩「サイノ　金で頼をはらず共、此岩川をどふなりと、腹の癒る様にして、身受は此方へさしてたも。コレ一生の頼じや　恩にも著よ。コレ手を下る、鐵が嶽」と、頭を壁にすり付て、頼心ぞせつなけれ。　皃「ムヽそんなら何か　踏れても撲れても、云分ないといふのか」　岩「イヤモ聞分てさへたもれば、譬此身は如何成ても」　皃「コリヤ相談が面白いはい。九平太様の名代に　マアちよつと斯うせうかい」と、立蹴にどふど踏飛し、皃「何じや、何びこ〳〵するのじや。わりやたつた今、云分ないと云うたぞよ。但云分が有のか」　岩「イヤ〳〵何の云分が有物で。サア〳〵何成と心任せに」　皃「ヲヽ其筈じや。惠海庵での意趣返し、わりや

九平太樣か　かうくらはしたか。イヤ斯う蹈だか」と、弱みを付込厄病の、髪も頭も引しやなぐり、さいなむ折から、表へいきせき「ハイ今日の相撲割でござりますもふ追付土俵入じや程に、早ふお出なされませ」と、書付ほり込立歸れば、陀多右衞門押披き、「何じや　鐵が嶽に岩川」「ムヽすりや今日は岩川と鐵が嶽」「コリヤ見い　おれと汝とが相撲じやとやい」「ムヽ時も時、折も折、わがみと我が立合とは、ハテ氣味合な事じやの」と、いふも心に一思案。「コリヤわれも池田の岩川といはれては、國々へ名の通つた者。又おれも大名のお抱へ　殊に大坂は初てなれば、此相撲しくじるが最後、扶持離れじや。すりや是二人ながら大事の相撲。九平太樣の名代に、惠海庵の仕返ししたれば、此算用は濟で有。又錦木が身受の事はおれ次第、ラヽ此鐵が嶽心次第じや。水心有ば魚心有、賴事も賴まれる事も、まあ今日の相撲仕廻ふてから、其上の事にせうわい。われも隨分神佛でも叩き廻して、おれに勝樣にせい。したが可愛や、おれと取たら骨身が碎て、重て土俵踏む事はならぬぞよ。どふぞ頭取衆を賴んで、振換へて貰ふて成と、取ぬ方が勝じやあろ。夫共に取て見よふと思ふなら　魚心有ば水心有、ナ岩川、土俵で逢」と、強い詞の何處やらに、味な鐵棒引づる雪踏、ぐわらつかせてぞ出て行。跡に岩川諸

水心有は云々―諺にて魚心あれば水心ともいふ

手を組、思案にくれて居たりしが、「段々日切の切た跡金、親方が催促するも、九平太が皆所爲、とかく鐵が嶽を抱込んで、あつちの身受を延して貰はふより外はない。と云うても一筋縄では往かぬ奴、抱込む仕樣は、ムヽ太夫が身請はおれ次第、魚心有れば水心有、ヲヽこりや今日の相撲を、ふつてやらざ成まいわいの。ソレ〳〵、彼とおれとが立合ふこそ幸、美しう振てやり、彼奴に勝を讓て置て、其上で退引させず、賴が近道上分別。とはいへ名取の鐵が嶽、何ふ魂膽して成共、投殺さにやならぬ相撲、いはゞ一生懸命の、大事の相撲を金故に、ふつてやる岩川が、心の内のせつなさ穢さ、摩利支天にも見放され、相撲冥加につきたのか」と思ひ廻せば廻す程、空恐ろしさ口惜さ、思はず拳を握り詰、身を顫はして男泣。始終立聞女房が、涙隱して、と云「ヲ　此方の人としたことが、先刻にから飯拵へて待て居るのに、爰で上るか奥へすよふか」と、何氣なければそ知らぬ顏、岩「イヤモ飯なら喰たふない。ホンニ角力から呼に來た。ドレ行て來う」と立上れば、と云「そんならもふ行しやんすか。コレ岩川殿、ソレ髮がきつう亂けて有ぞへ　人中へ見苦しい　結て上ふ」と取出す櫛箱、岩「イヤ結て居たら隙が入。つい撫付ておいてたも」と云「ヲヽお前もこんな髮して、行しやんした事はないが、いつその事何もかも、云

ふつて―負けて

摩利支天―武勇の神

いはしやんせ―言ふと結ふにかく　もくれ―怯れと後れ髪とかく

親父様―浮久水の出端―一時栄えてもすぐ衰ふ諺　千日に苅た萱―諺にて千日に苅た萱を一日に亡ぼすの略

ふて聞して下さんせぬか」岩「ヤ　いへとは何を」と「サイナお前の心のナ、それもつれ髪、撫付ておこうより、寧そさつぱりいはしやんせぬかといふ事いな」岩「イヤいふまいいふまい　何ほわしにいへといやつても　高が女の手業、いふたら大方おくれが出よふ。つい撫付ておいてたも」と、傍に直れば女房も、押てはいはぬもつれ髪、鬢のほつれを撫付る、櫛の背より夫の胸、寫して見たき鏡立。「サアよいか見さしやんせ」と、向ふ鏡の蓋取て、寫せば寫る顔と顔。と「申し岩川殿、色も青ざめ、そして目の内もうるんで、どふやら氣色の悪そふな顔付。もふ今日の相撲へは、斷いふて行しやんすな」岩「何をあんだらつくすぞい　いつはとも有今日の相撲は、鐵が嶽と此岩川、初日の出ぬ先から町中が、待て居る公の出合。何でも鐵が嶽を、土俵の砂へ埋にや置ぬ」と「イヤそりや嘘じや。今日の相撲は鐵が嶽に、ふつてやるお前の心」と、云ふ口押へて、岩「聲が高い。スリヤ先刻にからの様子殘らず」と「アイ一間で聞ておりました　僅な金に手詰つて、難義さしやんすがわしや悲しい。寧そ此譯親父様に」岩「たはけ奴、それいふ程なりや、此様に人に擲れ踏れはせぬ。昔氣質の親父様、打明て物いふと、禮三様に異見の何のとやかましい。若いお人の水の出端、若命生害に成た時は、千日に苅た萱じや。アヽ急な

事でさへなくば、工面の仕様もあらふに、わづか二百兩の金故に、大事の相撲をふつてやらざ成まいと思へば、腑甲斐ないやら口惜いやらで、おりや胸が裂る樣な」と「ヲヽ道理じや〳〵〳〵。さりながら、それ程の大事の事、連添女房に隱してゐる、お前の心が聞へぬ」と、怨み涙に時移り、早追々の呼使、「申土俵入でござります。早ふお出なされませ。ちやつと〳〵」に岩川が、しほ〳〵として立上れば、と「もふお前は行しやんすか」岩「ホ鐵が嶽を抱込で、工面の通りいきや格別。若も行ねば絶體絶命、これが暇乞にならふも知れぬ。さらば」と計一聲を、跡に殘して出て行。と「コレまあ待て岩川殿、たつた一言いひたい事」と、見れ共跡は雲霞、と「コリヤ斯ふしては居られぬ所。夫の命にかゝはる勝負、わしも是から相撲場へ」と帶引しめて夫の跡、慕ふてこそは三重行空に、響櫓のとうからと、打仕廻ふたる太鼓より、鳴渡つたる岩川と鐵が嶽との相撲割、表にべつたり貼り紙も、はりさく木戸口押合へし合、早土俵入事終り、相撲の數々取盡し、中入前ぞ勇ましき。「東西々々〳〵、道頓堀宗右衞門町、北野屋七兵衞樣急用でございます、一寸木戸迄お出なされませ」と、又も呼出す相撲の名乘、入かへ〳〵勝負も、今一番と夕日に連れて、「西は岩川々々　東は鐵が嶽〳〵」と、名乘上られ、しこ踏ならす

夕日にいふにかく

しょげ鳥—しをれて居る

ほぐし—ふり放す

もやくや—煩悶

垂—箱のすだれ

鐵が嶽、此方は猶もしょげ鳥の、しを〳〵上る土俵の上、「すは千番に一番の、相撲」と力む幾萬人、しづまり返つて見物す。「片屋岩川々々、片屋鐵が嶽〳〵。せくまい〳〵、せかずと顔を見合せて、やつ」と引いたる行司の團扇、直に付入鐵が嶽、ずつと兩腕指込す、元來覺悟の岩川が、既に危く見へたる所へ、「進上金子二百兩、岩川樣贔員より」と、聞よりぐつと岩川が、始の氣色何處へやら、鐵が嶽が諸ざしを、ほぐして土俵へ引くり返し、力士のごとくつつ立ば、「よいや〳〵〳〵」と數萬人、一度に立て手をたゝき、どよみを作る鬨作る、櫓太鼓も打出の、表は人の三重山なせり。次第々々に散る人の、中に紛れていきせきと、駕を舁せて北野屋七兵衛。來かゝる向ふへ岩川が、胸のもやくやさつぱりと、我家へ歸る戻り足、「ヨウ〳〵關取樣出來ました」と、跡から付て來る人に、見付られじと駕片寄、七兵衛が素知らぬ顔、ヱ「ハア關取さて〳〵今日はきついお手柄」岩「ホ七兵衛殿、見てじや有たか」ヱ「見た段か。何うやら取口は惡かつたが、引くり返した其強さ」岩「イヤモ今日の相撲は譯が有て、きつう取にくかつたが、味な事が張合に成て」ヱ「味な事とは二百兩の花か。コレ其花やつた旦那殿が幸爰にじや。逢て禮をいはしやりませ」と、垂を上れば、岩「ヤアわりや女房」とは「岩川殿、隨分健で居て下さんせ」岩「そ

んなら今の二百両は」七「コレ關取、お内義の勤奉公、志の二百両」岩「女房共、何にも云ぬ、忝い」七「サ駕の衆やつて」と北野屋が、氣轉利かして駕の垂、内は歎きに暮近く、入相つぐる鐘諸共、別れ〳〵に　三重行末は。

第三

昔の京と難波浦、春雨しげき夜の道、錦木諸共禮三郎、相合傘の濡事も、ひつたり濡る横しぶき。「コレ太夫、道々もいふ通り、わがみの身受の跡金故、岩川の女房が勤奉公すると聞。代に其方を北野屋へやらふとは思ふてゐるが、廓と違て、いかふ勤憎いといふ事じやぞや」錦「ヲヽ禮三樣とした事が、義理より辛い勤は有まい。お前やわしが身の上迄、段々世話に成ながら、おとは樣につとめさしては、どふまあ義理が立物ぞ。是非共代る此身の上、受出されぬ先じやと思や、わしやひつとつも厭はぬ」と、いふも涙に聲くもる。禮「ヲヽ道理じや〳〵。何をいふも皆わし故。日外團右衛門めに袴られた金の事、詮義をせうにも肝心の、團右衛門が行衛は知れず、何もかも身にかゝる難義の果は、一足づつに消て行ずば成まい」と、我身は暗き闇の夜に、光る眼も蛇の目傘。向ふにすつ

毛二才云々―書二才め何しをるぞ

ひばり骨―雲雀やせたる形容

くと鐵が嶽、「ヤアよい所で錦木太夫。岩川奴に負た意趣晴し、うぬを是から連ていて、九平太様へ手渡しすりや一廉金に成仕事。サア〳〵失せい」と引立る。禮「ヤイ鐵が嶽、錦木は禮三が身受して、今ではおれが女房。其女房を連て往て、金にせうとは盗人同然。われを代官所へ連て行。サア失せおれ」と、引ぱつても、ちつ共動かず。「エヽ毛二才め何ひろぐ。うぬに引ぱられて行間、此手はどふして居よふと思ふ。馬鹿つくさずと太夫を渡せ。いやといふが最期、幸ひ邊に人もなし、手短ふばらすぞよ」禮「ヲヽ譬此身はどの様に成ても、太夫を遣ては岩川へ云譯立ぬ」鸞「ヤア其岩川が猶けたいじや。疫病神で敵の儕。渡さにや斯うじや」と踏飛せば、「のふコレ待て」と錦木が立寄腰際引つかみ、「もふ了簡が」と武者振り付、禮三が首筋引とらへ「ひばり骨見る様な態をして、猪口才すな」と引寄て、握拳のめつた打。かよはき錦が手に當る、小石摑んでばら〳〵、礫に眼くらまぎれ、油斷大敵禮三郎、小股取れて鐵が嶽、體の重みにうごめく背中、すかさず禮三が取て伏、「爰構はずと早ふく」錦「必怪我して下さんすな」と、心は跡に島の内、北野屋さして別れ行。反ね返して髻髪、摑んでぐつとのつかゝり、鸞「サア太夫を何處へやりおつた。埋んだ所をサア吐かせ。此鐵が嶽を盗人とぬかした其腮、蹴裂いてく

れん」と踏付く、引廻されてもか弱き禮三、手向ひならぬ無念泣。禮「いかに手に合ふ物じや迚、余りむごい胴欲じや」鐵「ヤイ胴欲とは儕が事。九平太樣へ極る身受、岩川めが邪魔するも、皆儕から起つた事。地體此生白けたしやつ頰、見る度ごとに虫唾が出る。泥ぼに似合た是喰へ」と、摑んだ泥を口の内。禮「もふ是迄」と拔かくる、柄元しつかと、鐵「ハハアやるはく。こりや儕、毒もるのじやな。小い形して相撲取を殺さふとは、どぜうの地團駄叶はぬこつちや。サア切れく」と引拔て、互に爭ふ其中に、又も降りくる雨の足。禮三は引足放さぬ我武者、あなたこなたと引廻されて、稻村の内より出る刀の光鐵が嶽が肩先ぐつすり、「うん」と一聲、禮「南無三寶、手が廻りしか何とせん」と、心おづく一刀、鐵「うぬゑらい事ひろいだな」と、拔て切り込む白刃と白刃、稻村蔭に窺ふ曲者、あやなき闇の黑裝束、だんびら提げ後より、助くる加勢の滅多切。禮三が所爲と思ひ込、切込深田の泥まぶれ、猶ふりかゝる雨霰り。足もしどろに胸の闇、憎しと思ふ一念力、宛りくるく曲者が、威す足音禮三郎、又も怖氣の身もわなく、心そどろに千鳥足、こけつ轉びつ逃歸る。とつくと見濟し探寄、留めの刀一宛り、觸る足元落たる鞘、納めた思案の向ふへ挑灯、暫く忍ぶ身の廻り、雨具にかこふ立派の侍、家來を先に

あやなき—黑白知れぬ
だんびら—大刀

來る道筋、落たは何と手に取上、「燈明を持」と挑燈の、灯影に見付る邊の血汐。切倒されし大男、「ヤアこりや身が屋敷の抱の相撲鐵が獄。何にもせよ心得ず」と内改、紙入より取出す一通、詮義の種と開く間讀む間稻妻の、挑燈ばつたり曲者は、跡をくらまし三重落て行。

根津―念珠の關　礒に見る―波の枕詞　大阪の關―相撲の關にかく　なみ〳〵―浪、普通　類ひ名取―類ひなき名取　四つにも組ん―相撲の手と妻の名よつにかく　一萬二千云々―骨牌にて勝ち得たる數

第四

昔は西に根津が關、今は東に白川の、關も物かは礒に見る、なみ〳〵にては大坂の、關はゆるさぬ場所に、類ひ名取の千羽川。其川風にもまれては、四つにも組ん柳腰、如在内義の世話に成、お才はさいつ比よりも、爰に假住假初の、緣を鶴屋の禮三郎、合せ骨牌のかよる島、有なし知らぬさま育ち。丁稚でもない相撲取の、ひよこと見へるうそうそ前髪門口から、「藤縄半右衛門申ます」。吉兵衛樣の御病氣、ちつと能ごんすか。今日晝網に取ました此鰡お裾分申ます」よつ「ヲヽお心にかけられて、殊に鰡は吉兵衛殿の相角力、追付是にあやかつて、力付しやる吉相。能ふ禮いふて。御大義じや」と、溜紙に百、口先でころりといはす手取かよ。合せの勝負讀む骨牌、「一萬二千二萬五千、三萬八千が

お才様の勝」　ゐ才「アノどふして是が勝じやぞいな」　ょっ「ヱヽ不器用なお才様。まだ覺さんせぬか」　ゐ才「サイナ歌骨牌取と違ふて、むつかしい物じやわいな」　ょっ「ナンノ是がむつかしい。禮三様に末永ふ合せの勝負、跡は女夫の一番相撲と、世間廣ふ出ぬけるかため。團は小野川お才様、よいや〳〵」と譽られて、赤らむ顔は朝日山、解けぬ心の禮三郎、「イヤ合せにおいては、我等きついすいほうなれど、斯う札が來てはいかぬ。その筈でも有、此間から段々と詰らぬ身の上、どう思案しても叶はぬ〳〵」　ゐ才「叶はぬ戀と思ふたに、わたしが様な阿房に緣の惡緣でござんせう」　禮「又斯惡うも來る物か。いつそ此方から身を捨て。南無三寶命を取れた」　ゐ才「ア是なア氣にかゝる事云はしやんすな」　禮「イヤもふきつい目にあはされ、とんと禮三が絶體絶命」　ょっ「アレまだいな。お才様の業じやない。其科はお前じやはいな」　禮「そりや何故に」　ょっ「ハテお前が切しやんしたじやないかいな」　禮「ヱヽい何をわしが何時切て」　ょっ「はて今の程お前の出に切た札、科人は矢張お前。身を恨だがよいわいな」と、つい手合にいふ事も、疵持足の裏背戸に、心置るゝ折も折、破編笠人相は、見ねど見す〳〵惡者作り、うそ〳〵覗く姿素振。小氣味惡さに禮三郎、「アレ誰やら人が」と納戸口、はづす弱みへ疫病の、神様株が仲上り「こりや花々

すいほう―粹の意が
まだいな―まだ其様な事をいふ
手合―戯
疵持足―諺の疵持足の笹原
疫病云々―疫病神の惡人

下あれ―下されの亂

すべない人云々―不當なに少しでも貸しては

あじやち事―冗談

なめ上る―無禮極まる

げんさい―衒妻、妻を鬻りていふ詞

しい勝負でごんすの。ドレ一望姓して來ふか　内義樣四五十兩貸して下あれ。貸ても借る、貸にやねだ切引たくるのじや」と、呑共いはぬ烟草盆、煙管どぶとういやがらす。お四は騷ぐ色もなく、「ムゝ金が借たい。安い事やの。五十兩なと五百兩なと、何ほなと貸ふが、こな樣誰じや。ついに見た事もない、すべない人にもじきなかでも、貸しては此方の人に立ぬ。此女中樣と合せ骨牌のあじやら事、勝負事の何のと、人聞の悪い。こつきの威嚇喰ふのじやない、出直さんせ」と取あへず。かたり「ヤイなめ上るな。御法度の勝負事を商賣にする證據には、今おれが影を見て、隱れおつた男め。ちらりと見てもさす物じやないわい。けんさい相手にするのじやない。爰の亭主は何といふ。亭主に逢ふ〳〵」よつ「イヤ此方の人は瘧を病で久しう寐て居らるゝ。殊に今日は瘧日で、そんな事聞すと忽大熱、そりや止しにして下さんせ」かたり「だまれやい、病氣ならてこのぼんや、せいといふ赦しが有か。出さらにや爰へ引ずり出す」よつ「アゝこれ〳〵、夫ばつかりは堪忍して。コレ拜ます」と詫る程、かたり「何じやの有ふと亭主めを、代官所へ引ずつて行のじや、出され〳〵」と猶聲高、病家の一間洩聞へ、千「およつ〳〵、おれに逢ふといふのは誰じや。ドレ出て逢ふ」といふ聲も、病に屈せぬ大男、大坂一番千羽川と、一目にしるゝ關

取風。見るより恟と判れ顔、千「わしに逢たいとは此方樣か」かたり「アノ爰の亭主といふは」千「アイ私でごんす」かたり「イヤアこりや叫はぬ」と逃出す。千「コレ〳〵待んせ。樣子聞てから其跡で、きつと馳走もせにやらぬ」かたり「其御馳走が痛入ます」千「イヤ〳〵遠慮のない事。わしやもふ嗅が知て居る通、土俵の上の勝負より外、腕立する事が嫌ひ。久しいの煩ひ余り氣が重い故、昨日月代はして見たれど、まだ瘧が落ぬ故、いつからやら、ふつょりと力業をして見ぬが腕がためにナア嗅、どこぞ入ぬ體が有なら、ほきほき摑み碎て見たい」かたり「エヽイ」千「ハテこれ、何を其樣に震ふのじや」かたり「ハイこりやお前樣の瘧の身代りでござります」千「鳥渡爰へごんせ」かたり「イヤもふ夫へは憚多い」よっ「ハテ行んせ」と女房に、突やられてもびつくびく、蛇に追れし蟇、「頻見てやらふ」と禮三も立出、一ヤア儕は善九郎め。團右衛門と一所に成て、よふ勘當さしたな」と、胸ぐら取手をしつかと取、善「コレ禮三殿。此善九郎は此方故に、斯ういふ風體。わがみは恨まず逆ねだり。それ計じやない、一昨日の晩、難波裏で鐵が獄が殺された　其殺人も大方違はぬ詮義が有。サアわせい」と引立て行善九郎が、肩骨摑んでぐつと押付、千「嗅、手拭ひ」と手ばしかく、腮立させぬ猿轡、五尺の體ぐる〳〵卷。「詮義の有盜人め、身動き

びつくびくーびく〳〵慄ふ

わがみはーわがみをば

腮云々ー口たゝかせぬ

納戸かち—何とせうにかく
あなかしこ—穴にかく
次郎—岩川

ひろいで邪魔に成。ちつとの間何處へなと、ぶち込んで置たいが　ハテどうせうぞ」納戸から、「幸　爰に明半蓋」壬「イヤ〳〵、のら猫の爪研ぐ樣に、ばた付ては面倒な　寧そ爰へ」と疊の下、幸　簀櫃のあなかしこ、逃さぬ思案の極樂落し、跡踏しめて立直り、壬「マア是で片付た。あゝして置たら此方の儘。禮三樣も何やかや　定て意趣も有けれど、晝は目に立、まあ晩の事」禮「成程〳〵々々、とつと是で胸が晴れた　今夜中に岩川にちよつと逢ねばならぬ譯。行て來ませう」と立出る。壬「申〳〵、お前の脇指はどうなされた」禮「ヤ、アノそれは」壬「ござりませぬか。御勘當のお身の上は、猶以て世間へ外聞。何故丸腰でござります」と、いふに返事も差詰り、行當る顏尻目にじろり　「大方誰ぞを賴で、質物にお入なされたで有。あの脇指は、親御からの御祕藏じやげな。すりや見知の有一腰。何處から何う廻つて、ひよつとひよんな所の手に入たら、お前計か親御のお名の出る事。寶は身の指合せ、金さへ有ば買れる道具でさへ大切。まして親御の血を分て讓受た、お前の身は猶大切。何處へお出なされう共、必命を大事にして聊爾な事なされますな。斯いや艶らしけれど、前方はしみ〴〵と、物いうても下されなんだが、お才樣の緣に連て、今では次郎同然に、念比にして下さるお前じやによつて此御異見、悪ふ聞て

夕間暮―うちあけていはれぬにかく

ぎごつ―つつけん・ん

下さりますな　御合點かへ。早ふお歸りなされませ」と、明て夫とは夕間暮、口にいはねど過分さを、拜むが諸事の禮三郎、心殘して出て行。あす「申お早ふへ―も口の中、まだ夫とは云兼る、おほこ娘の案じ顏。千「是は扨、追付戻らしやる人を、もふ一生も逢れぬ樣に、何でござりますぞいの。尤錦木といふ色が有ど、禮三殿故に欠落迄してござつたお前。氣遣ひせまい　吉兵衛が添します。とはいふ物の、お前には云号のお侍、丹波の御家中津田兩助樣、まだ緣は切ませぬぞへ。萬一先から大坂迄、詮義すまい物でもない。嗅余り外へ出しますな」ょう「ナニそりやお才樣よりお前の事。今とつくりと養生して、秋の相撲から出にやならぬ大事の體を、ちつと能いと、月代剃て氣丈立が惡いわいな。今日は又發日じや。寒けの來ぬ内蒲團でも著て居やしやんせ」千「何ぬかすやら、夕立のせぬ先に、下駄はいて歩れる物かい。なんぼ煩ふてゐても、地取などすりや氣合がよふなる。おいらが内に寐て居ると、鳥籠に鶴入た樣で、氣が詰つて一倍惡い」ょう「そんならどふなと勝手にさんせ。何でもわしがいふ事は聞んせぬ」千「ヲヽ相撲取は、女房のいふ事、聞ぬのが好いのじやわい」と、ぎごつな詞も關取の、中のよさとぞしられける。日も暮れ過て藏屋敷の、奴が挑燈日印を、尋來る立派の武士、「千羽川の吉兵衛殿は此方

か」「アイ〳〵何方でございます」武士「イヤ苦しうない者　在宿ならば御意得たし。手前が事は津田兩助と申者」千「エ、イあの兩助樣。そりや丹波の御家中」兩「いかにも左樣」千「エ、是はまあ時も時。兩助樣じやといなァ」と、知らず聲より驚くお才、心半亂半がいの、ふためき隱す小屏風に、押かこふ間も有やなし、兩「御免ならふ」と打通れば、素知ぬ顏に手をついて、千「吉兵衞と申は私。津田兩助樣と申は、ついに承はりませぬが、何用有てか、能ふこそお出。私も瘧を病まして、見苦しい病家、無禮は御免。お茶上ませい」と落付て、腰をすへたる心の配り、兩「成程存じ召れぬ筈。手前初て參つたは、ちとお身に尋たい事有て。其子細は、身共が屋敷丹波の抱、鐵が嶽といふ者、一昨夜難波裏にて切殺され、何者の業共知れ申さぬ。此儘に差置ては國の恥辱。若は相撲の意趣切か、御身の商賣體なれば、知まい物でもないと存じて」千「ハア夫でお出なされたか。そりやもふ憚ながら、きつい御了簡違ひ。マア第一負ても勝ても、相撲に意趣といふ事はない事でございます。殊に此仲間で、喧嘩事が嚴い法度。又思召ても御覽じませ、相撲取が我儘に、喧嘩を好いて致そふなら、世界に人種はございませぬ」兩「ム、尤。然らば今一つ尋たいは、お手前は近江の屋敷三島彌太夫に出入するとな、其娘お才を女房に申受

ふためく―慌て騒ぐ、騒にかく

ふと契約した兩助。然る所お才には、不義の男有て勘當せし由。今にも顔を見合すれば侍の意路、眞一つに打放さねばならぬ時宜。彼不義の男は、鶴屋の禮三と聞た計り、ついに顔を見知らず。こりやお手前存じて居ぬか」壬「ハヽ〳〵〳〵、樣々の事をお尋。相撲取と申者は、大坂中の町人衆、皆彼方からは御存知なれど、此方に一々覺ませぬ。山伏の内へ來た樣に、ちとおなぶりでござりますか」と、猶押强ふ押かこふ、屏風に女房が胸ひや〳〵。力めばいとど身の震ひ、吉兵衛もはつと計り、「お侍樣御赦されませ。例の瘧で俄の寒け。女房共羽織々々」と身に引かけて、何處も彼も包廻せし氣扱ひ。顔も一曲朱鞘の一腰、居士衣の裾のざん切髪、「吉兵衛殿お宿にござるな。男氣な此方と見受ち御無心に參つた者。拙者元は由緒の武士、浪人の世渡り、そと致した劍術指南。面目ないが尾藥を枯し、差替の一腰賣に參つた。何と求て下されまいか」と、脇差前に指置ば、壬「是はまあ余義ない仰やり樣。御浪人のお嗜、定て天晴お道具でござりまうが、町人の爲には、猫に小判。人切術存ぜねば、刃物買ふ樣がない」武士「イヤ其脇差計は、此方が買つしやれにや成まい。拵は何にもせよ、心を篤と目利して、お買なされて下されい」「ムヽ心の目利は私も不得手なれど、左樣ならばドレ　ちよと拜見」と拔かくる。鉚の血汐に鯉口

包―著物に包むと準備を置すとかく。居士衣―白衣そとした―ちよとした　尾藥―尾羽

鉚―刀のつかもとを回したる金

いか程なりとーいか程なり共

すつぱ云々ースツパと善九郎を切つた血刀を差出す

ぴつしやり。武士「ナント其心を見ては、外の手へは遣られまいがの。イヤハヤ替つた所に有た脇差」千「コレ〳〵出所は兎もかくも、氣に入た買ませう」兩「イヤ其脇差、兩助が買申そふ」千「いつかな事成ませぬ。吉兵衛が買ました。シテ代物はな」武士「千兩の折紙。サア金がなくば質取ましよ。其質物は是爰に」と、小屏風くわらりと引退れば、千「コリヤ何とする」武士「サレバサ、刃物のかはりに、女中道具の小袖櫃。此場に有ては、事の破れに成そふな物。中改めずに此儘で質に取たい」千「イヽヤあの半蓋は」武士「いやなら千兩」兩「チヽサ價はいか程なりと、先其心を、兩助が改めん」と立寄を、取て突退蹴上る疊。下からぬつと以前の善九郎、見合す浪人、善「ヤアお頭」と、いふ間稻妻吉兵衛が袈裟にすつぱと紅の、脇差目先へ差出し、吉「お望みの心とつくりと御覽なされ」と居合腰、兩「チヽ見事々々。鉗元より切先迄、微塵曇らぬ男の魂。ハヽア天晴驚入。眼前に人を殺した吉兵衛と、人の科迄身に引受る心で有ふが、夫はそれ、是は是。況んや其奴夜盜と見へた、どふで首の無い奴。併し不思議なは最期の一句。變つた所に近付の有盜賊め。詮義の種にも成べき物、ハテ殘念」と兩助が、尻目に彼奴も底氣味惡く、浪人「吉兵衛殿金子調達、只今急にも成憎くからふ。其脇指は預て歸る。有無の返事を拙者が宅へ、後

程迄に待中」平「ム、御浪人のお所は」浪「天王寺樂人町澤田伴龍とお尋なされ」平「澤田伴龍殿。今宵中に屹度參らふ」浪「然らば」平「おさらば」浪「お侍是に」とばかり默禮に、邪智を隱して立歸る。平「兩助もお暇申さふ。段々子細の有そふな事、身共が用事は人殺しの詮義計。武士が賴に參つた詞、反古にも成まい。お身此詮義しておくりやれ」平「イヤ人殺しは私。」此奴只今は盜賊なれ共、元は善九郎と申て鶴屋の手代」平「ム、夫なれば猶以て、其奴は殺しても大事ない。此兩助樣子具に存て居る。鶴屋大恩の下人として、主人の金を橫取した奴。凡引負の科人は、主人の家にて庭成敗に行ふが大法、天罰は遁れず　自然と主の刃にかゝる　其脇差の出所は、いはぬが祕傳の折紙道具。必々何時迄も、身を大切に、虛事のない樣。お手前はまだ知るまい、お才が親三島彌太夫事、預りの長光の刀紛失の誤り、此刀が出ぬ時は、彌太夫の身の大事、夫に付て、鐵が嶽が死骸の傍に落して有つた、此紙入こそ一ツの手がかり、是をお身の手に渡さば、其中に其方の入用の物も有ふ。詮義の筋が見へたらば、大義ながら身が旅宿迄」平「委細畏り入ました。シテ貴公樣はいづ方に」平「イヤ旅宿の所書、則認め參つた」と、差出せば押披き、平「ヤアこりやお才殿への去狀」平「チ、道程僅か三行半。怪我の無い樣去荷の注文、

庭成敗―内々の刑罰

三行半―近き意をかく
去荷―去狀の意をかく

半蓋の二人―お
よつとお才

無事に落付身の行末、此上ながら頼入。萬事後刻」と諸事の譯、胸で納めた千石取、藏屋敷へと歸らるゝ。妻も立出、危い所漸遁れた、半蓋の二人が悦び。吉兵衛は兩助が、詞のはしゞ、紙入の内より出る狀一通、繰返し見て驚面色。壬「心得ぬは澤田伴龍、どうでも彼奴には子細が有。コリヤかふしては居られぬ」と、脇差ぼつ込門口へ、「女房内に氣を付い」と、いひ捨つゝと出て行。ょっ「サア〳〵お才樣悦ばしやんせ。今日といふ今日、此去狀が禮三樣と女夫の堅め。ほんに是も兩助樣のおかげ〳〵」と、足跡を戴く疊むつくりと、思ひがけなき以前の浪人、ょっ「スワ盜賊」といはせも立ず、およつが小腕さげ緒の早繩、打込戸棚の鉈前しつかり。浪人「お才怖い事はない。そなた故に浪人した團右衛門じや。エヽィ吉兵衛を出しぬき、竹垣破つて忍び込だも、そなたを連て往のふ計じや。おれはわれに惚て居る、われは禮三に惚て居る、定ていやで有ふけれど、かう鱶が見入てからは、逃ても逃さぬ。否でも應でも抱て寐る。爰へおじや」お才「アイ」團「ハテおじやいのふ」お才「アイ。エヽとつともふ惡い時に。あれへ〳〵」も女聲、團「なんぼ呼でも吉兵衛は、爰らには居ぬわい。叶はぬ事じや、枕直して抱れて寐い」と、根強う仕込蜻蛇眼、逃さぬ門口吉兵衛が、戻りかゝつて戸をたゝけば、内に物音吹消す行燈。

あやなし—黒白分ちず

かは—親身の反對

千「明かぬは不思議」と表から、踏碎く戸の破口、互に探る暗紛れ、闇はあやなし摺ちがふ、手にさはつたる帶の端、すつぱと切て團右衛門、跡を暗まし逃失たり。才「吉兵衛様か」千「お才様か。帶解ひろげて、コリヤ何じや。手に殘つたる男の帶。ムヽエヽ此方様は〳〵。禮三殿に添そふと思ふ、吉兵衛をかはにして、こりや外に忍び男が出來たの。徒女郎、人でなし」才「サア〳〵〳〵道理じや〳〵。此云譯はおよつ様、出て下さんせ」に、ぐわたつく戸棚、錠、捻切て引明れば、ょ「此方の人、遲かつたわいの。最前の浪人が、わしを縛てお才様に、無體の戀慕」千「ヤア〳〵〳〵そんならあの浪人は、兼て咄しの」ょ「アイ村岡團右衛門」千「扨こそ知れた。程は行まい、此道筋、詮義の近道」逸參に、跡を慕うて三重追て行。

第五

天滿大川一飛に、南のはづれ寺町筋、直には行ぬ團右衛門、うねくる野道幾筋も、眞一文字に、千「ヲヽイ〳〵伴龍殿」伴「と呼だは誰じや」千「イヤ吉兵衛でごんす」伴「是は〳〵、大方彼の脇差の返事。金子才覺出來ましたか」千「イヤ其約束の金子の代、其元に買て貰た

い物が有て」伴「ムヽスリヤ脇差の價に、ソリヤまあ何を」千「是」と差出す帶の端、ハツト
惚り、千「伴龍殿、是計は此方が買にや成まいがの」伴「ムヽ如何にも買ふかい」千「ヲヽ價
は千兩、こなたの胸に貯へた、惡事の算用受取かい」伴「イヽヤ何にも覺ない」と、振切
て行朱鞘の鐺、しつかと取て、千「卑怯な伴龍、代物を見て返事もせず、こりや何處へ行」
伴「イヤ其代物所望にない。持て歸れ」千「いつかな〳〵、しかけた出入は互の命。そつち
へ賣か、こつちへ買か、三寸俎板工のばれ口」伴「放せ」千「放さぬ」强氣と不敵、手練の
當身にうんと計、下地の瘧に身はがち〳〵、足踏しめる其隙に、逃ても千「どつこい逃
さぬ〳〵」伴「イヤサ伴龍は急の用事。退て通せ」とかけ出す、向ふへ廻つて又取付、彼
奴も一世の大事の奥の手、劒術達者の伴龍に、一寸ひかぬ男の魂、右へかはせば右に
立、左へぬければ引戻す、互に大汗たら〳〵おり、腰にすがつてぶら〳〵〳〵、投ても
踏でも放さばこそ、さしもの手者も持余し、一度にどつかり地響に、一息ほつとあぐみ
し面色。伴「扨々丈夫な魂な男、凡劒術一道には、誰こはい者なけれ共、お手前が土
性骨には伴龍も叶はぬ。畢竟が元は此方から、仕懸た出入の鬱鶴返し、是で五分々々と
いふ物。其方の脇指の事も、此方の帶の詮義も、口外へ出さねば濟事。もふ了簡して歸

彼奴—吉兵衛をいふ

手者—劒術の達者

りやれさ。夫共に聞分なけりや、手竝は今見る通り、此度は吉兵衛、わが命がないぞよ。もう是切で、サア〳〵歸れ〳〵」と、云捨立上れば、千「イヤ〳〵〳〵天滿の吉兵衛が出入しかけて、病犬の棒に逢た樣に、逃吠にしては立ぬはい。殊に相手は劍術仕、ぶたれてすご〳〵戻つたといふて、どふ此頰が出されふぞい。もふ何もかも外の出入は取置て、こなたに打れた此顏を立にやならぬ。猶金輪際付纏ふて、此方を殺すか　おれが殺されるか、二つ一つじや。命は始から投出して有わいの。サア〳〵〳〵殺して下あれ、殺してもらを」と、胸打たゝき、赦さん氣色はなかりけり。伴「ムヽ成程尤じや。お手前を殺せば、身も解死人、何の益に立ぬ事に、互に命を果す道理。併し身共に打れて、此儘に歸つては男が立まい。何と命を捨ず共、男の立仕樣はないかい」千「一札が貰たい」伴「ヤ」千「イヤサ町人出入は、高が相手を誤らしてさへ戻れば、何處へ出ても男は立。命が惜くば伴龍、誤り證文書て貰ふかい」伴「ムヽはて味いなせりふに成たな。投られて、誤り證文取とは、神代の昔から聞ぬ事じやが、それで腹のいる事なら、どふ成とせうわい」千「そふなふては叶ふまい。サアちやつ〳〵と書れい」と、腰の矢立も磨き込、二十三夜の月明、心の墨墨黑に、「誤り證文件の如し。澤田伴龍」と、書認め差出せば、懷より

取出し、合す證據の一通、千「ホヽ、墨色筆法紛ひもない同筆。御約束の通り備前長光の刀、追付指遣はし可申候、一原九平太殿、村岡團右衛門」伴「ヤア其狀は」と取付を、一當あてゝ尻引褰げ、又立かゝる伴龍が、腕首ちつ共働せず、千「刀の盜賊團右衛門、九平太方へ長光の刀賣てくれいと賴の狀。使に立た鐵が嶽、死骸の傍に落して有た儕が手跡。此手と比べて見たい計に、投られてやつたのを、誠と思ふが儕が天命。西國江戸方の關取と揉で來た此體、うぬらは小指にも足物かい。お才殿の戀の意趣、禮三を殺して仕廻たがる工の一々、引くゝつて屋敷へ連行、何もかも白狀さす、覺悟せい」と睨付れば、破かぶれと村岡が、差込腕、合點と擔いでどうど車投、朱鞘の一腰引たくれば、伴「それ遣ては」としがみ付、ひばらをはたと眞の當、うんと倒るゝ其隙に、月に晃めく刃の光り、千「鉗に噂の彫物は、お才殿の咄に違はず、正しく是が備前長光。ヘヱ、忝しく」と、押戴押戴く。所の大勢物音に、「喧嘩々々」と立騷ぐ。「ヤア棒の端ちつとでも當るが最期、爲にならぬ。千羽川の吉兵衛が喧嘩の立引見物せい。此奴は段々詮義の有奴、連て往んで活を入、しごいて存分いはせにやならぬ。天滿迄付て來て、立引の譯見て置」と、腰にほつ込長光の、刀の詮義伴龍が、帶の前がはわが帶に、しつかと握る證跡は、隱

ひばら―横腹

れ紛ひも大坂に、男の吉粹關取の、天滿をさしてぞ　三重

第六

庄「中居衆〳〵、中のしやぎり打やんで、今座付が始まつた。棧敷は西の二三の續、東の五の下、孫の出共に、五組のお客樣方へそふ申しや　火鉢は好いか煙草盆」と、喚けば奥より中居のお品走り出、「ヲ、庄七殿やかましい。しやぎり打切たも知て居る。夫でお出というけれど、此藤江は何故來ぬ。あれ程約束して置に、不參が有てはならぬといふて、最一度せきに」といふ中に、奥より出る長崎客、刀提、「コリヤ〳〵中居、顏見世見るとて一人は見られぬ。呼にやつた女郎は來るか」もゑ「サアお前の仰しやる新造樣は、奥に來て居さんす錦さんと、是にござんす桂さん、跡の女郎樣方は、皆前からの知れた顏。錦さんは曲輪からお出たが、若西でのお馴染かへ」客「いや西にも東にも近付はなけれ共、身共が望む女郎は、是迄勤した者ならず」もゑ「そんなら錦さんでもなし」客「エヽぐづ〳〵と隙がいる。藝子はまだか、何故急に呼にやらぬ」と、ぱち〳〵はぜる山出し炭、おこり散らせば、もゑ「御尤、もふ〳〵爰へ」と、いふ間もなく、里に名代の藝子の藤江、

しやぎり―芝居の幕明などに行ふはやし
孫の出―孫庇

ぱち〳〵云々―山出男の怒るさまにかけ炭といふより燃ると怒るにかく

蛇の樣な—大酒家を蛇といふ

立つた腹には紅葉を流す—立つた腹に鯉田川をかくれしいしさし—間の「し」はハサミ言葉即ち「廓三」もん共—俺等

いきせきと來る上り口、お品「そりや藤江さん遲かつた、座敷はさん〳〵。御機嫌直すお醫者はお前。マアお藥箱から上ませう」藤「アイ〳〵、今日は北の粟七平で、きよ野さゑだ荻野、蛇の樣な、藝子樣に引とめられて醉たわいな」客「フウ藤江といふは其元か。待ち兼た待ち兼た。影繪の名人と有、サア〳〵見度い。三味線が聞たい。尺八が所望。舞が見たい」藤「ヲヽせはしな、其樣に一時に如何なるものじやいな」お品「ヲヽなんぼ藤江さんじや迚、そりやもう八人藝の座頭でなけりや いかぬ事」客「こな中居共は、身共がいふ事一つも用ひぬ。拙者が所望する事、何故邪魔する」藤「アヽこれ叱りないな。其樣にむしやくしやと、立た腹には紅葉をながす。ソレ〳〵〳〵、それ、ちよつとお間致しましよ」桂「アヽ嬉し、藤江さん能ふ來ておくれた」藤「ヘエ桂さんの御挨拶、痛み入ります。錦さんは如何じやへ」桂「アイ是もいんまに。れしいしさしじやわいな」藤「そんなら又お客が やしきしもしちしじやあろ」客「何の事じや 長崎でも聞ぬ唐音、こりやおん共が事誹るのじやな、いかふ心に障るわい」藤「何のさふではないわいな。とかく座敷で呼ばば、餘所の可愛い色事咄し。錦主も長であろ」客「此奴、三味線は彈かず、影繪は見せず、踊はせず、長であろとは、身共が鼻毛でも笑ふのか。其長とは何の事」藤「サア夫

白い手拭云々―忍び男がある謎かけ―長に對はんこして半こといふして半こといふか
行燈居眠る云々―夜更

はな、歌長やれ〳〵、花のお江戸は兩國橋とや、白い手拭横長であろ」桂「長の因縁かくの通り」藤「とはしやれ〳〵」桂「問ましよ〳〵」藤「何なと問しやれ」桂「お客は〳〵」藤「はんこでござんす」桂「鑿子は〳〵」藤「ばゝ樣〳〵」桂「中居は〳〵」藤「かしこの色事、よい此〳〵」賴政は、鵺を射留て御機嫌を、なほす藤江が口車、打連奥へぞ入にける。行燈居眠る時分より、忍ぶ禮三が戀の書、錦が揚は足代屋の、潛戸半に窺ふ素振、内を覗て小手招き、目早く見付る中居のおさか、門口へ走出、「ヲヽ禮三樣、お前のお出は合點。錦さんもわたしが所へ今日出初め、御用が有ならわたしが呼。マアおはいり」と、取持ぶり。禮「ヲヽ其事でちよつと來た。今夜逢ねばならぬ事　爰の客は一原九平太で有ふがの、あれには逢れぬ。首尾を見て此文を、錦にそつと渡してたも」と、背中をぴつしやり、賴む者よりたのもしきは、さすが所に住ばなり。禮三は門を西東、忍ぶに日立大挑燈、北よりと書贔屓より、立子這子に譽られて、いなにはあらね岩川も、心いきせき足代屋の、門で見合す顔と顔、岩「ヤアー禮三樣じやないか」禮「ヲヽ治郎か」岩「お前を尋て漸　爰迄。聞や錦さん來てじやけな」禮「アヽ其事は隱して居るに」岩「されば錦樣を斯うせまい爲、私が心を盡したも水の泡。あの人に勤さしては、おれが顔が立ませぬ」禮「サア〳〵尤じや

南風も一來と氣にもなちぬか

見ると云々―見ると聞くとは大違ひとられて―相撲の縁にて一ぱいくはせる

尤じや、あれもながふ勤さすでもない」岩「其魂膽が猶氣づかひ、是非今夜は連て往ぬ。お前もごんせ」と手を取ば、鷹「イヤ其客といふは、日外の一原九平太。おれが往てはむづかしい、どうぞ隱れて行たいが」岩「夫ならわしが仕樣が有」と、行尺合ぬ長羽織、人目を包む黑縮緬、頭巾も顏へすつぽりと、さながら假著と見へにける。岩「サア〳〵お出」と、門口へずつと入れば、座敷廻りの庄七、「やれ珍らしい關取樣。禮三樣お出ぬので、南風も吹ぬかへ」岩「吹けばこそ出て來やんした　客衆一人連て來た、何處ぞ座敷が明て有か」庄「アイ小座敷が明てござります。サア〳〵是へ　まあお上り。お供はどこへじや」岩「イヤ〳〵供は芝居へやつた」庄「へエいや申、あなたは何方でござります」と、問れて早速の出ぬ岩川、「イヤあれは江戸方の關取衆じや」庄「エイわたしは法師樣かと思ふた。して彼方のお名は何と申ます」岩「フウ貴樣　此關取知らぬか、コリヤ氣疎い。あれが大關の里見山じやわいの」庄「エヽいつやら私が所のお客が、あなたの手の形を持てお出なされたが、ハテ見ると聞とじやな」岩「イヤ〳〵惣別相撲取は著細りがする。あれでも裸に成てまはしかゝしやると土俵一ぱい　アヽ見せたいな」と、鼻動かさぬ相撲取、とられてどつこい庄七が、庄「前髪の有源太樣、我等は差詰百姓役。辻法印と里見山、能ふ似た事じや」

と打笑ひ、打連座敷へ浮れ行。今宵初めて錦木が、縁と義理とに引されて、一度の勤も男故、座敷はづして勝手口、窺ひ出るも案じ顔、跡から藤江が走出、「コレ錦さん、如何じやいな。おさか殿の言傳物、渡す首尾がなかつた故、大事にかけて持て居た。サアにつこりと笑ひ顔」と差出す文に飛立思ひ、錦「コリヤまあ誰が持て來たへ」藤「やつぱり直に禮三樣、門口覗いて」錦「是はしたり」と尋る中に、小座敷より頭巾羽織で立出れば、はつと惚り立寄て、錦「ヤアお前は何時の間に」禮「コレ〳〵藤江主、若次郎が尋たら、此狀渡して先へ往んだといふて下んせ」藤「そりや禮三樣取て居る」錦「わしも奥から尋てなら」藤「そこらはわしが左平次で」くろめる中に奥よりも、「藤江々々」藤「アイ〳〵、何處へ隱さふ」所も幸蒲團にくる〳〵衝立の、障子ぐはらりと一原九平太、「藤江」藤「アイ」「わりや其處に何して居る」藤「イエ爰に顔見世行で、臺所に人氣がない故、張番しておりまする」「ハテ實氣な者じやなあ。錦めがおらぬ故、夫を尋に爰へ來た。新町から南迄、付纏はつて惚ぬく九平太。夫と同じ樣に付纏ふ虫が有。でも叶はぬ物は、金銀といふ物におさへられ、虫めが動きも這も得せぬ。氣味のよい事じやないか、ナア藤江」藤「其金の有黃金虫より、金が無ふて泣虫が」「そこらにおらふ」と立寄を、藤「チテント

左平次云々一口を出して

顔見世行一人皆芝居の顔見世へ行きて

テツン　歌鐘に恨が數々ござる、初夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり、後夜の鐘をつく時は、寂滅爲樂と。コレ何じやぞいな」二「イヤ此衝立の内へ」藤「ア、滅相な。コリヤわしが商賣の影繪の樂屋、見せる事はならぬぞへ」二「フウ衝立の影繪見たい。火をくはつと燈て見せい」藤「ハイ、お目にかけまする影繪の始り。余り近いと見へが惡い、必樂屋を覗くまいぞ。斯う火を燈て致しまするが、梅が枝の無間の鐘」二「其歌おれが諷うてやろ。歌　二八十六で文付られて、二九の十八でつい其心」藤「人の心もしらいで、面白そふに諷ひくつさる」二「おれが諷ふが氣にいらぬか」藤「コレ間がぬけるわいな。ヲ、それよ、奥へ行は錦樣じやないか」二「どれ〳〵何處に」と立上れば、火を吹消て、藤「もふ仕廻。サア是からわつさりと、お品殿おさか殿、呑直そふでは有まいか」「よかろ〳〵」と、無理やりに、押立奥へ連て行。此間にちやつと小座敷へ、關取樣に相應な、相手は手取の錦島、砂子屏風の土俵入、化粧紙迄氣を付る、行司役やら頭取やら、背中の兀た古鬘子、調子合ふたる三味線の、身に引かけるぞ賴母しき。二「中居共中居共、錦は何處へ。此九平太が目をぬいて、勘當受たならずめを取込で、うぬらが戀の中立か。此小座敷が物臭い」と、立んとするを、庄「ア、申、お前は醉てござるのか」二「彼の樣なこざ酒で醉ふ樣なお

無間の鐘―此鐘をつけば未來は地獄でも現世は富豪になる

相手は云々―以下相撲の縁語にして醒三錦木の床入を仄めかす

ならずめ―ごろつき

こざ酒―こざは婚舍と書く

大前髪―岩川

どんざ羽織―粗末な羽織

ひやいな―危い所

れじやない」庄「サァ聲高におつしやるので、なんで彼處に人が居よ」二「ヲヽ居るか居らぬか此羽織」と、引たくり、屏風ぐはらりと引明れば、江戸夫にはあらで大前髪、江戸張の銀煙管、煙輪を吹空嘯き、くつ〳〵と吹出せば、さしもの九平太恟り仰天、俄に口をすへ千鳥足、「是は〳〵麁相千萬、酒を食べ過して、思はざる不調法、御免なれ〳〵」岩「いやもふ苦しうござりませぬ」・二「イヤ〳〵お氣に障つたら眞平〳〵」岩「ハイ勘當も受ませず、元來人樣に虫といはれた事もなし。又虫で有ふ無屈もなし。マアそんな物じやござんせぬか」「左樣共〳〵、其元さへ其氣なら、拙者は安堵致したり」と、行んとするを、岩「申々、そりやあなたのお羽織でござりますか」いはれて恟り持たる羽織、二「ハアヽヽヽハヽ〳〵〳〵、是は重々不調法、是は貴公のお羽織な」岩「私がどんざ羽織でござります。是は〳〵、勿體ない其儘〳〵」二「イヤサ是を御緣にお近付、又來春はお出來しなさるゝであろ。其節は緩々と」醉ぬ所を醉さるゝ、科をば酒にぬり付て、頰押拭ひ入にける。錦はそつと走出、「次郎樣のお蔭にて、ひやいな所を遁れた」と悅べば、岩「コレ錦樣、此方樣に逢たい計に、先刻にから來て居やんす。お前を拝へて腹立るではなけれ共、どふつぶして下んすのじや。わしが爲には太切な禮三樣、其お方に連添ふお前。其

勤をさすまい爲、おれに隱しておとはめが拵た金。そふさしては、此次郎が顏が立まいと思ふてか。お前方お二人を、首尾よふ親御の内へ入たら、ほんに嘘じやごんせぬ、商賣冥理、投殺されても大事ない。是程に思ふのに、お前も聞へぬ、禮三樣も胴欲な」と、太切にする眞實は、誠に關取一疋なり。錦は始終差真とかふの諸へもなかりしが、「其お心が嬉しさに、禮三樣と云合せ、親方樣に譯いふて、今日からの此勤、氣遣ひして下さんすな。此苦界も暫しが中」岩「サア其暫の中が猶氣遣ひ」と、せり合ふ中に奥よりも、お品が走て、「申次郎樣、長崎のお客樣、お前に烏渡逢たい迚」岩「イヤコレ今夜はおれも取込。よい樣にいふてたも」お品「イヤもふ爰へ見へます」と、いふに錦は、「次郎吉樣、まだ咄したい事が有、後に〳〵」と行跡へ、程なく出來る田舍客、「是は〳〵珍らしい」と、立出る、顏見て舞り、岩「ヱヽお前は淨久樣」錦「アヽこれ〳〵、常住急な所でお目にかゝつた故、見忘れも尤。變つた所で變つた形、よい年して傾城買に來た親父、其女郎は北野屋から出る新造。此方衆夫婦の志が、餘り忝なさに、外の客には買すまい、おれが身受する心で、今夜來て樣子を聞ば、勤て居るは錦木、買たい女郎は爰には居ず、此金もいらぬ物、勘當した悴めに金やらう筈もなし。コレ次郎殿、花に貰て下されぬか」岩「扨はそん

なら此金で」彛「イヤ〳〵おれは何にも知らぬ田舍大盡。おれが事より彼奴等が、息才で居る樣に、朝夕祈る此珠數の力にも、叶はぬ物は國の掟。鐵が嶽が殺されたも、團右衞門が業とはいへど、喧嘩の相人はやつぱり悖。町人が人を殺しては、遲いか疾いか風の燈火。爰らにまい〳〵しておつたら、淺猿い死をしをらふと、夜の目も合ぬ因果な長生。古來希なる大盡客、どろぼが可愛ければこそ、厚かましい此厚鬢。何事も次郎吉殿、頭にめんじて賴ます」と、立上れば、岩「そんならもふお歸りなされまするか」と、庭へ送りの駕の者、彛「次郎殿さらば」何事もいはぬ色なる山吹色に、誠殘して立歸る、親の情は身にしめど、人を殺せし罪科は、遁れぬ禮三が身の覺悟。奥より中居が走り出、「わしや先刻にから出度ふても、咄しがしゆんでひかへて居た。禮三樣からお前へ此文、藤江樣から賴れた」岩「どれ〳〵」と開いて見るより、「是はしたり、何時の間に往なしやつた。エヽ悅ばす事が有に。イヤ少との間も斯して居られぬ、わしや北野屋へ居て來る間、錦樣に此樣子戾つてから咄しましよ。つい行て來ふ」と岩川は、悅び勇み出て行。錦は文を見るよりも、有にもあられず走出、忍ぶ禮三を見付しより、「エヽお前は聞へませぬ、何でわたしを振捨て、死る覺悟の此書置」と、いふ口おさへる折こそあれ、藤江は

しゆんで―酣になつて

見る目云々―地獄の閻魔の廳に視目嗅鼻とて亡者の善惡を視察報告するもの官目の須賀市にかく

三味線持ながら、「コレ錦さん、誰ぞ來るなら知らして上よ」と、座敷紛らす三味太鼓、錦「ヲヽやかましうて、一つも咄しがならぬわいな」おつと心得すぢかひ身、合す調子の糸調べ、「アイ〳〵、それ錦さん、呼ぶわいな」ちやつと吹消す燈火の、紛れに拔ける禮三郎、外からぴつしやり暇乞、はなれぬ思ひ胸の中、闇の錦も諸共に、拔けて出る氣を呑込藤江、二階から見る九平太が、鬼の目をぬく暗がりに、潛戸ぐはらり、「ハイお尋なさるゝは二三軒西でござります。能ふお出なさりました」

第七

町の名も、鰻谷とて長堀を、少し南へ入口も、間口も狹き裏貸屋、かつて鶴屋の禮三郎と、名前は有ど外を家、留主は隣の須賀市が、見る目は無ふて嗅ぐ鼻と、聞耳立る門の口、葬禮戻りの上下ため付、我家へ歸る禮三郎、「アヽ須賀市市、御苦勞〳〵」須「ホお歸りなされましたか。きつう遲ござりましたな」禮「さればいな、他宗の葬禮といふ物は、隙が入て惡い物。外なれば行ぬけれど、家主の葬禮に、さながら病氣も遣はれず、せう事なしに行ました。そりやそふと留主の内に誰も來はしませなんだか」須「來た段ではござ

りませぬ、道頓堀の北野屋の者じやといふて、三四人の聲がして、押入を明る音、其處邊内を、もんどり返して往なれましたが、ありやマア如何した事でござります」「サア如何した事やら、あそこの奉公人が欠落した迚、今朝から夫で丁ど三度、わしがした事の樣に迷惑な事でごんす。此奉公人めも何處にはいつてけつかるやら、いつそ爰へうせ上ると、是程わしも案じぬ」と、むしやくしや腹に上下も、引しやなぐるやら引切やら、見へぬ座頭が、「イヤもふ日暮れそふな。内に又稽古人が待て居られふ。どれお暇申ましよ。用が有なら、何時成とお呼なされませ」と、我挨拶をしほにして、とぼ〳〵隣へ立歸る。跡に禮三がつつくりと、今いふ通り、尋に來るからは、内は首尾能う出た物が、どふして今迄來ぬ事、と案じに暮れる胸の闇、いとど物憂き一つ鉦、無常は餘所か、こちゝ〳〵と、石と金との相性が、あらば火の降る火燧箱、付木に付て行燈に、灯す火影の明り窓、入口の戸もしめ〴〵と、又も案じる隣には、稽古の音〴〵高々と歌浮名をながす堀江川、流れに淀む捨小舟、つながぬ緣は是非もなや、戀路の鬼か丹波屋の、妻に通ひのかねごとも、昨日も今日の飛鳥川、「アノ歌は古手屋八郎兵衛。友達の香具屋を戀の意趣で切たといふが、又腹も立ふかい、蝶よ花よと樂みに、思ふた色を盗まれては。是

しやなぐる―むしる
しは―よいをり
こちゝ―此方にかく
かねごと―豫言にて豫ての約定
飛鳥川―變轉極りなきにいふ

果し長堀―果しなきにかく

鮟鞨―醒にかく

を思へば錦木めも、夕べ内を出ながら、今において來ぬからは、外に心が。エヽそふいふ根性共知らず、親にも身にもかへたのが、口惜いわい無念なわい」歌姑みの釼研ぎ立て、我と身を裂く鰐谷、堺筋より半町も、錦が尋夜の道、濱邊も果し長堀の、人目を包む頬冠り、しめる門の戸打叩き、「卒爾ながら、禮三樣の所は内方じやござりませぬか」と、尋る聲は錦木かと、出んとせしが、禮「誰じや〳〵　そんな人はこちらじやごんせぬ、何處ぞ脇を尋さつしやれ」錦「そふいはしやんすは禮三樣じやないかいな。コレわしじやわしじやわいな、ちやつと明て下さんせ」禮「何じや、わしじや。チヽどふで鷲か鵰か、爪の長い猿松め、猫め、畜生め。エヽおのれは〳〵、憎やな」歌今宵の内に、やつきり〳〵やつきり、切殺し、浮世の夢を鮟鞨の、鯉口寛げ落し指、早初夜の鐘指折て、「コレイナ　明てくれんのかいな、人が見付りや悪いわいな。コレ禮三樣、何が腹が立ぞいな〳〵、口舌所じやござんすまい。夕部の揚は足代屋の、出られぬ内を漸〳〵と、藤江樣の情にて、出事は出てもお前の内、爰共知らずうろ〳〵と、尋る内に夜は明る、どふも仕樣は中橋の、知るべの方に今日の日の、暮るを逢瀬と待兼て、尋迷ふて來た物を、聞へぬわいな禮三樣、思ふに違ふお詞」と、言ふ間も疑ひぐはらりと開き、禮「チヽそんな事とは知らず、夕

もじやちずー來ず

部約束した通、二人一所に死る覺悟で、先へ戻つて待て居れど、わがみがおじやらず、内よりは二度三度、家探しに來る上は、欠落したに違ひはないが、今迄爰へ來ぬからは、どふで外に心が有て、おれをすつぽりやつたな、と腹が立て恨んで居たが、今のお聞し」鍋「疑ひは晴たかへ」禮「ヲ、其心底を聞上は。サアマア上りやく」と入口の、戸をひつしやりと差向ひ、禮「シテ今云やつた中、心にかゝるは其知るべの方から、若知れはしまいかの」鍋「イヱくそりや、氣遣ひして下さんすな。よし又そこから知れてから、明日迄待ぬわたしが命、お前の覺悟はどふぞいな」と、恁れかゝりし女郎花、涙は膝に置露の、いづれはかなく見へにけり。禮「何の夫に念押事。岩川や千羽川殿が　樣々と心を盡して下さるれど、夕部わがみにいふ通、鐵が嶽を殺したる此禮三、すりやどふで生て居られぬ身の上。ガ兎角心にかゝるは親父樣の事計。夫で吉兵衞殿や、岩川へ賴の書置。爰で死んでは恥の上塗、大坂の町をはなれて、濱の寺迄行て死ふ。用意がよくばサアおじや」と、手を取ば押留め、鍋「マアくく待て下さんせ」禮「ム、待といやるは、心でも變つたか」鍋「何の心が變りませふ。さらくそふではなけれ共、お前と夫婦に成たいと、思ふを勤の樂しみに、暮した甲斐もなき命、せめて今宵の半時を、千年も添し心に

知れてからー知れたにしても

わがみーお前

て、ほんの男じや女房じやと、飯焚眞似や水汲む眞似、世帶する眞似して死だら、未來の迷ひは有まい」と、さすが女のくど〳〵と、いふも涙に紅の、錦あやなす諸袖に、いとど色添ふ計なり。聲「ヲヽ、尤々。そふ思やるなら、わしも俱々手傳ふ程に、飯しかけて焚てたも。幸ひ今日は親父樣の誕生日。アヽ是迄は不孝の仕續。せめて女夫が養焚して、蔭の膳なと据るなら、夫が此世のお暇乞」と、涙隱して押入の、米取出しあてがへば、洗ふすべさへしらげの米、しほ〳〵下りるはしり元、とぎ流したる白水は、顏に艶どる白粉の、解けて涙の炊しき水、夫は燃す釜の下。錦「申、旦那さん、飯盛る物が有かいな」聲「ヲヽ、あの人はせはしない、まだ出來もせぬ内から。ソレ押入に茶漬茶碗が一つ有」錦「アイ」といふまゝ取出す、錦模樣の染付も、「ヲヽ、穢な、コリヤマア何時洗ふたまゝじやいな。ほんにやもめといふ者は、あた自墮落な」といふて見る、心がほんの女夫事、錦「ソレ飯が焦げ臭いぞへ」聲「ヲット合點、燃え杭を消す此身も消る身」と、いへば錦も顏見合せ、又も涙にむせびしが、「アヽ我ながら愚痴な事。ソレあらいげのさめぬ内、釜から直に盛てたも」と、机の上に白紙を、敷いて備へる影の膳。聲「御誕生日の御祝義、目出度ふ上つて下さりませ。親父樣母人樣　是迄一日お心休める事もなく、親に先

しらげ―知らず
にかく―はしり元―流し元
あた自墮落―馬鹿になまける

立つ不孝者、其上碌な死も致しませぬ、憎い奴と思召、必泣て下さりますな。此上に歎をかけ、お身のいたみにもならふかと、夫が悲しうござります」と、夫が歎ば妻は猶「わしも在所に一人の父さん、年寄といひ目は見へず、去年祭に見へた時も、練物に出るわたしが、髪切たと聞てさへ、あられぬ姿と泣しやんした其時、イヱ〳〵無事で居りやこそ此様に、お健な顔を見まするとと、諫めた私が先立て、刃にかゝり死だ事、在所へ知れたら嘸や嘸、歎きの程が思はれて、悲しいわいの」と伏まろぶ、心の内ぞ遣る瀬なき。せめて名残に一筆と、硯に向ひ磨る墨の、こいとや誰も招かねど、まだ盡果ぬ親子の縁、錦が親の手を引て、そろ〳〵北野屋七兵衛が、戸をほと〳〵と打たゝき、「七兵衛でござります、ちよつと明さしやつて下さりませ」と、いふ聲聞て二人は悔り、「そりや親方じや、どふせうぞ。まあ爰へなと這入て居や」と、巨燵へ無理に押入の、蒲團打被せ禮三郎、俄に作る寐惚れ聲、禮「誰じや、モウ寐ました」七「イヤ七兵衛でござります。御無心ながらちよつとお明なされて下さりませ」と、いふに否共不承不承、戸口明れば、七「ハア、是はもふお休みなされましたか」禮「ホ誰ぞと思へば七兵衛殿。アヽ夜夜中見へたのは、定めて錦木が」七「アヽ申々、今夜は揚でござります。コレ爰に居られま

こい—濃いと來い
北野屋—來たにかく
押入—押入るゝと押入

驚きなされます事は一下にありませぬの語を略せり

すは、錦木が親父殿で。イヤ〳〵何も驚きなされます事は。此親父殿は目が見へませぬ、其見へぬ目をして、娘が顔が見たいといふて、日の暮に見へましたれど、錦木は揚で内には居ず、折悪う今夜は泊人が大勢有て、此親父殿を寢さす所がございませぬ。夫で近比御無心樣ながら、今夜一夜さ、どふぞ親父殿を、お前の内に寢さして貰ましよと存し、ハイそれで連て參じました」と、聞てはつとは思へ共、氣取られまいとそ知らぬ顔、「ヲヽ易い事、幾日成共」七「泊めて下さりますか、ヤレ〳〵嬉しや。サア〳〵親仁殿上らしやれ。ヲツト危ない、とば〳〵しよまい。ドレ〳〵手を引て進ぜう」親父「ハイ〳〵アヽ親方樣、段々お慮外樣でございます。アヽ何方樣じや存じませぬが赦さしやつて。アイ今晩はおやかましうございましよ」と、怖々するに禮三郎、「イヤ〳〵其樣に氣をはらずと、ゆるりとしてございませ」親父「ハイ」七「いやコレ親仁殿、あなたはずつとお心安い程にゆるりと思ふて」親父「ハイ〳〵、アヽいかいお世話さまでございまするな」禮「ナンノナンノ」七「いや申、然らば私は、モ歸りましよ。御面倒ながらお頼申上ます。長居したらどふやら、重井筒の巨燵の段が。イヤ禮三樣ちよつと〳〵、あれ迄お目に掛りませう」と、伴ひ表へ立出る。禮「マアお前にお悦ばせます事が有。扨錦が立金は受取ましてござ

重井筒云々―近松の重井筒に德兵衛が房を巨燵に隱して兄を迎へしと同じき故いふ

ります」禮「ムヽ、そりやマア何處から」禮「イヤ岩川殿から受取て、濟で有事は知らず、夕部から見へぬ錦。夫でこれ、此年季證文をお前へ渡さふと思ふて持て參りました。立金が濟だからは、どふせふと、お前方の心の儘じや程にナア、死いでも濟事なら。といふて止めても鐵の、網の中へ入ても、死神といふ物が付ては、人間の力にや及ばぬ。わしも北野七兵衛といはれては、島の内で顔の賣た者、人の命を取とめる事なら、譬立金取いでも、奉公人に涙もかけぬ、恩にも著せぬが、あの親仁殿、爰へ連て來たの計は恩にきせねば。アレ目の見へぬ人が、うろつかしやるのを見ては、いかな氣の強い死神でも、思ひとまらにや成まい。ナ申、必々禮三樣、是いはふばつかりに、イヤもふお暇申ます。コレ〳〵親仁殿、往にますぞや」親仁「ホ親方樣、お歸りなされますか。そんなら申、夜の内でも娘が歸りましたら、憚ながらお知らせなされて、一時なと早ふ顔が見たふござります」七「ヲヽそりや尤じや、戻り次第知らせませう、禮三樣、早ふお休なされませ」と、情を殘す情の商賣、切はなれよき親方に、別れて禮三も内に入。其間も待ず蒲團押退、飛で出るを禮三がとゞめ、逢ては惡いと仕形と身振、蒲團を口に押當々々、泣聲隱す心づかひ。此方は何の氣も付ず、親仁「申旦那樣」禮「エヽ、何ぞ進ぜませうか」

親仁「イヤモウ何時でござりましよ」禧「さればもふ四つ半にも成ませうか。ヲ遠道を歩いて、定てお草臥、ドレ寐所をして進ぜませう」親仁「イヱ〳〵申々、御勿躰ない構はしやつて下さりますな。遠い道を探りもふて參じますも、娘に逢ふと思ふ樂しみ、嬉しうて〳〵、寐た迚中中目も合ふこつちやござりませぬ。イヤ申、もふ何時でござりませうな、今夜はむしやうに夜が長い。ア、早ふ夜が明てほしい。ちやつと逢たい〳〵」と、今宵限りの命共、知らず明るを待兼る、親の心ぞ哀なる。錦は正體なき内も、書殘したる硯箱、筆取上ればいとど猶、涙にむせぶ泣聲を、隱す禮三が咳拂ひ、「ナントマア親仁樣、袖の振合せも他生の縁とやらで、斯うした若い者の、お年寄を泊めますれば、わたしはもふ親と思ふております程に、お前も子の所へ來たと思ふて、心安ふなされて下さりませ」親仁「是はマア勿體ない事おしやまして下さります。お前樣方に其樣に、結構にいはれる親仁めじやございませぬ。在所者なり目は見へず、したが今日を喰兼は致しませぬ。其喰兼ぬも娘が影。マア聞しやつて下さりませ。十年計跡迄は、長柄村でともかうもした百姓でござりましたが、ふつと目を煩ひまして、身上有切打込で、とう〳〵盲に成て、途方にくれて居ました所を、今北野屋にをります姉が、新町へ勤奉公に參つてくれまし

もしやまさすー仰しやりますの略

て、其給銀を庄屋殿へ預ケ、月々の利足を取て、夫で私が樂々とくはれる樣に成ました。ほんにあの樣な孝行な娘は、世界中には有まいと、思ひ出す度には、旦那樣涙がこぼれて嬉しうござります。夫で一日成と早ふ勤を引したいと存じましても、目は見へず、錢設の術は知らず、思ひ付て去年から、按摩取を致します。コリヤ私が身の冥加。是も娘が顏の汚れる事じやと思ふて、あれには隱しております。ヤほんにちつと、肩揉で上ましよかい」醒「ハイそりや忝ふござりますが、そんなりや御苦勞ながら、肩よりは此手を、コレナ此手をお前のお手で、じつと握つて下さりませ」と、錦木が手を持添て、出せば此方も指寄て。親仁「ア、お手が痛ますか　お安い事、揉で上ませう共。ドレ〳〵お手を。テモ和らかな尋常な、丁ど女の樣なお手ぢや程にの」醒「イヤナニ　親仁樣、何とヤア人といふ物は何時知ず　老少不定と申ますれば、かういふ私が、明日死のやら知ぬ命。若死だら、是が此世の暇乞にも成ませふ程に、手先をじつと」親仁「ア、旦那樣にんげな事いはしやりますはいの。其樣におつしやりますと、心細ふて成こつちやござりませぬ。地體此間は、夢見が惡ふて案じております上、大坂の茶臼山で心中が有た、イヤ太左衞門橋では切たの、彼處では突たの、と聞度々に胸がひや〳〵。若姉めではないか知ら

にんげな事＝人んでもない事の意歟

ぬと、それで案じて參りましたが、親方樣の健なとおつしやるので、ア、嬉しやと落付てはおりますれど、ソレ今おつしやる老少不定、ひよつと姉が煩ふて、わたしより先へ死だら、此親は如何せうと思ひますれば、俄に悲しう成て來て、御赦されて下さりませ」と涙をぬぐふ塵紙の、薄き親子の契りかと、物いひたさと悲しさに　錦は胸も張裂く思ひ、蒲團に喰ひ付しがみ付、前後涙に伏しづむ、心ぞ思ひやられたり。早丑滿をつげの鐘、はつと禮三が氣もそゞろ、書置ひとつに手ばしかく、「申　親仁樣、私は晝約束がございます故、更けましたけれど、ちよつと近所迄往てさんじます程に、もし留守の中、京飛脚が來ましたら、此狀渡して下さりませ」と、いふ中錦を引立つれど、更に正　躰立足も、なく〳〵禮三にいざなはれ、出る戸口は死出の門、是が親子の別れの涙、思へば胸にたもち兼、わつと計に泣く聲の、血筋の肝にこたへてや、親仁「今のは慥に姉が聲。コリヤ娘よ、何處に居るぞいやい。親方の詞といひ、先刻にからの樣子といひ、何で親に隱れるのじや。姉よ〳〵〳〵」と立上れど、方角もなき目なし鳥、壁にばつたり行燈はぐはらり、二人も探り大坂の、町は生死の堺筋、涙ながらに　三重　辿り行。

正躰云々ー正躰もなく立足もなく泣々

下が〈—衣の下前
藻鹽草—書置の文
堺筋—境にかく以下皆懸詞
順慶町—順にゆくにかく
米屋—籠め
煙共—燒かずに
安土町—土
備後—便宜
瓦町—かはらず
淡路町—逢ふ
伏見町—俯す

第八

道行闇路の町續

夢にだに、見し夢さへも死出の夢、覺ては何時か此娑婆へ、歸らぬ道も夜嵐や、吹風寒く身にぞしむ。往來まばらの軒のつま、結びとめたる下がへの、主よ女房と只一夜、それが未來の晴れ小袖。綾も錦がうら若き、二世と契りし禮三郎、今宵限りの命ぞと、書殘したる藻鹽草、一ほんに誓紙の數よりも、手を取かはし行先は、あの世この世の堺筋、あゆめど道も捗らぬ、跡には親の枯れ殘る、老木の老の逆さまに、順慶町も空ごとや、わしとお前が憂事の、あだな契を米屋町、本町筋の軒深く、思ひ初たる中なれば、煙共せず諸共に、埋まばなどか安土町、男も同じ二世三世、生れかはりて又爰へ、親の便を備後町、永き未來を瓦町、かく成果る我々は、いつの因果を身にうけて、共に憂目に淡路町、悔むは愚痴と平野町、とは思へ共棄つる身を、とがめてほゆる犬の聲、道修町筋過行ば、早眞夜半の月代の、空恐ろしく行惱む。しばしは爰に伏見町、高麗橋の果迄も、共にぞ連んだながら、所詮此身は人殺し、一所に死れば親々へ、不孝の罪も恐ろしよ。そ

なたは生て亡き跡を、頼む」と計憂り聲、錦は涙の聲を上、「生る共死る共、二人一所と云かはし、今の辛さをあの世にて、閨の咄しの樂しみと、思ふて居るに胴欲な。大事の大事の父樣に、かへて可愛いお前の事、忘れうとすれど猶更に、思ひ切にも切れぬは、如何した結ぶの神さんが、結ばしやんした緣じややら、いふにいはれぬ鴛鴦の、番離れぬ中じやもの、お前に別れてそもやそも、何とながらへ居られふぞ。共に殺して下さんせ」と、縋付たる恨泣、禮「道理々々〳〵」と撫さする、顏は涙の横しぶき、戀故に降る露時雨、爰や彼處に立止まる、浮世小路の緣薄く、水のあはれや大川を、越へて急ぐは後の世の、緣を祈りて寺町や、今ぞ誠の女夫池、人目つゝみのやう〳〵と、濱の寺にぞ著にけり。

浮世小路―隙子にかけて緣薄くと續けたり
あはれ―泡

第九

禮「サア錦、覺悟はよいか」と拔放し、既に最期と見へける折から、團右衞門九平太に繩をかけて、千羽川岩川諸共駈け來る跡より、津田兩助淨久お才を伴ひ來、「まだ生て居てくれたか」と、親の悅び兩助も、「團右衞門が白狀にて、彼奴等が惡事明白、鐵が獄は九平太と馴合て、殿のお金を盜んだ盜賊、禮三に科なき御政道」と、聞て岩川千羽川、次

郎吉吉兵衛、「世話甲斐有て重疊、何かに付て兩助樣のお影〳〵。猶此上は御本妻はお才樣、お妾は錦木樣」一座「成程々々。先囚人引立よ」と、兩助がさいばいにて、家に羽を伸鶴屋の禮三、池田の關取、天滿の關取、千兩々々二幟、其名を難波に上にけり。